

王の剣士 番外二

暁を渡る

雅



近衛師団第一大隊に配属されたのは、師団の入隊試験を首席で通つてすぐの事だった。

通常であれば一兵卒から始める所を、首席というその成績と、おそらくはもう一つの理由で、下士官、いわゆる「幹部候補」の地位が与えられた。

もう一つの理由——俺の「家」だ。どこにでも、影のように付いて回る。

俺が配属された最初の部隊は、左軍第一小隊だった。

正式名称を、近衛師団第一大隊中隊左軍第一小隊という。

各大隊は其中で三つの左・中・右軍各中隊と、中隊の中で更に五十人単位の十の小隊とで編成される。小隊は二隊を一組として、少将が指揮を取る。そしてもう一つ、大将の直轄で戦略・戦術を提議する機関である参謀部があった。

一大隊の兵数はおよそ千五百名。近衛師団全隊の規模は四千五百名と、さほど大きいものではない。

だが、王を守護する役割を担っているだけに、それを構成する兵は家柄に拘らず、剣技において優秀な者が多く揃えられていた。

幹部候補と云えど、配属当初は一般の兵と共に訓練を行う。

まずは小隊で数ヶ月訓練を受けて過ぎ、個々の能力や傾向を見た後、中隊の指揮系統に進む。一旦准将として隊を率いた後は、能力のある者はそのまま士官として出世し、運と実力さえあれば近衛師団総将に登り詰める事も、可能だ。

運と実力。近衛師団は特にその傾向が強いと、俺は認識していた。

現在の近衛師団総将は高い家柄の出身ではない。特に、俺の配属された第一大隊の大將は王都の出身ですらなく、近衛師団に入隊後僅か数年で身を起したというのは有名な話だ。さすがにその例は稀で、それには相応の理由がある。

ともかく、俺にはその傾向こそが、近衛師団を選んだ理由の一つでも

あった。

配属されたその日に、第一大隊の大將に面会を許された。

大隊の副将に伴われて訪れた部屋は、けれどもぬけの殻で、副将の慌てたような表情が少しばかり面白かった。

だが、少々拍子抜けした事も事実だ。もっと肅々と、儀式張った面会があるものと思っていたからだ。

第一大隊大將の名はレオアリス。その頃から既に最高位と呼び慣わされる程の剣士だったが、その姿を眼にした事はまだ一度も無かった。

「剣士」とは呼称ではなく、一つの種族の名だ。

剣士とは自らの体の一部、多くは腕などを剣として戦う者の事を指し、その者の持つている力が、そのまま剣の力として発せられる。有する戦闘能力は大きく、剣士一人で百の兵を抑えるとも言われる。種としての個数が少なく、稀な存在でもある。

上官など誰でも良かったが、どんな男なのだろうと、やはり純粹に興味があった。いない事に肩透かしを食わされた気分になったのは確かだ。

副将は剛直な表情の上に僅かに動揺の色を浮かべ、今日の面会の中止を告げると、大將を探すためにだろう、慌しく去った。

あつげに取られてその後姿を見送り、仕方なく、俺はもと来た回廊を戻る事にした。だが、この後の予定をまだ聞いていない。確か演習があつたはずだが、どこで行われていて、どう行けばいいのか。何ともまあ悠長な組織だ。

いくらか逡巡した後、結局副将の戻りを待つべきだろうと思ひ直した。しかし執務室内で待つ訳にもいかず、かと言って扉の前でただ待つというのも気が進まない。待つ間の居場所を探す為に士官棟の中庭を見渡すと、庭の一角の棟と棟との隙間に、蔦の絡まった木戸があるのに気が付いた。

何とはなしに足を向け、扉を潜って垂れ下がる蔦を掻き分けるように小路を進むと、裏庭らしき場所に出る。手入れの施されていない、忘れられたような庭だ。元は小さいながらも整えられていたのだろうが、植

え込みの緑もその間の芝を敷いた小路も荒れるに任せて放られている。

二、三步建物の壁沿いに歩きかけたところで、その小さな庭の中央で、誰かが芝の上に寝転がっているのが目に入った。

陽の降り注ぐそこで、さも気持ち良さそうに眠っている。

隊の誰かが任務を抜け出し眠っているのかとも思ったが、見れば士官服を身に纏い、それなりの地位が伺えた。俺の足元で草の踏みしだかれる微かな音に、男はふっと眼を開いた。

上半身だけ起こして俺を見たのは、俺よりも年は下で、まだ少年の域を抜け切っていない外見をしていた。よくて十五・六といったところだ。新兵程の年齢でありながら士官服を身に纏っている事に軽い驚きを覚えた。

俺に向けられた瞳は、その髪の色と同じ漆黒。若い声が耳を打つ。

「こんなところで何をやってる。迷ったか？」

芝の上に胡坐をかいて座り直し、眠そうに問うその態度に多少の不服を感じながらも、第一大隊の大将に面会に来たがいなかったのだ、と告げると、僅かに驚いたような顔をした後、可笑しそうに笑った。

立ち上がり、伸びをしながら俺を手招く。見方によれば、かなり横柄な態度だ。気乗りのしないままに傍へ寄ると、その意識が顔に出ているのだろう、そいつは大して悪いとも思っていない口調で、悪かったな、と一言告げた。

次に続いた言葉は、すぐには頭に入って来なかった。

「来るのは知ってたんだが。ちよつと天気良かったからな。言つとくけど、すぐ戻るつもりだったんだぜ」

俺が不審を面に出したのに気付き、一旦自分の姿を確認するように見回してから、右手を差し出した。

「レオアリスだ。今日からお前の上官になる」

屈託のないその態度に、状況を理解しきれないまま差し出された手を握った。身長は俺よりも頭半分ほど低い。とは云え、俺は六尺程の身長であり相手がそれほど小柄な訳ではなかったが、それでも視線を下に向ける事でより一層相手の子供っぽい印象が強まった。

「……は？」

上官……？ —— 『レオアリス』

思わず不躓に見返すと、そいつも俺をじっと見つめ、再び、今度は声を上げて笑いだした。

「……何か」

「あー、悪い。剣技も兵法も首席で通過したっていうから、もつとごつい奴かと思ってたんでな。ずいぶん優男で驚いた。けど、だいぶ性格も悪そうだし、中々肝が座ってそうだ」

初対面で随分な——と言うより、それは俺の言うべき言葉ではないだろうか。

『最高位の剣士』——レオアリス。

それこそもつと、先程の副将のような屈強な大男かと思っていたが、目の前のそいつは、確かに鍛えられた体格をしていたものの、その言葉から想像するには細すぎる印象があり、愉しげに笑う姿はいっそかわいらしくすらあった。

「戸惑ってるな。まあ、初めて会った奴は大抵そうだ。気にするな」

軽快な口調でそう言って歩き出し、俺が動かないのを見て振り返る。

「どうした？ 今日一隊は南の演習場で訓練中のはずだが」

どうしたも何も、まだ指示すら受けていなかったのだから判るはずがない。けれども自分のせいだとは一切気付いていない顔で、レオアリスは歩き出した俺を見上げた。再び、喉の奥で可笑しそうに笑う。

「噂は聞いている。何でも卒なくこなす、つまらなそうな顔をした奴だつてさ」

的を射た評価だとは思うが、当たっているだけにあまり面白くはない。小路を抜け、扉から回廊に出たところで、端からレオアリスの姿を認めた副将が声を上げて大股に歩み寄ってきた。

「あー。あの場所は言うなよ。ばれたら俺の昼寝場所がなくなる」

副将が傍に来る前に、レオアリスは俺に向かって声を潜める。まるつきり、一軍を預かる将という雰囲気ではない。

「どちらにいらつしやつたのです！ 本日は幹部候補の面会があると、

朝申し上げた筈です」

恨めしそうな顔を見せる副将に、レオアリスは悪びれもせず、ひらひらと片手を振った。

そうして並ぶと、副将の方が遥かに体格が良く年齢も上で、押し出しもしい。どちらが大將か、初めて見る者は大抵は間違えるだろう。

「悪い悪い。ま、ちよつと色々……」

昼寝をしたくて、とはさすがに口に出しはしなかった。もっとも朝っぱらから寝るそれを昼寝と言うのかは判らない。

「全く。どうせどこかで寝ていらしたのでしょうが……」

そこで漸く副将は俺に気付き、具合の悪そうな表情を浮かべた。

「ヴェルナー一等官、ここにいたのか。将、彼が面会の」

「ああ、自己紹介は済んだ……よな？」

確認するよう後ろに立っていた俺を見上げる。自己紹介というより、先刻は自分だけ話して勝手に納得しただけだ。俺の言葉など一つも聞いてはいない。

「お……私のご挨拶が済んでおりませんが」

「そうだった」

大して興味も持たれていないのだろう。釈然としないまま、改めて頭を下げる。

「ロットバルト・アレス・ヴェルナーと申します。本日付中で中隊左軍

第一小隊に配属されました。以後よろしくお願い申し上げます」

「さつきと変わらねえけどなあ。ま、いいや、期待してるとこだ。頑張れよ」

何を期待しているのか、さっぱり判らない口調ながら軽やかにそう言うのと、レオアリスは俺に背を向けてさつきと歩きだした。

「ヴェルナー一等官。この後は左軍の演習に参加してもらう。すぐ南第二演習場へ向うように」

副将は慌しく視線を俺に投げてから、レオアリスの後を追った。

暫くその後姿を見送り、俺は漸く、南第二演習場とやらへ足を向けた。

演習場に着いた時には、左軍の訓練は既に始まっていた。

左軍中將は俺がレオアリスに面会する事を承知していたのだろう、特に遅れを咎める事なく、第一小隊の准将を呼ぶと、俺をそのまま託した。

准将に伴われて隊まで歩く間、様々な視線が注がれる。

「ヴェルナー？ 本当にあのヴェルナー家か」

「首席だったよ」

「学院院出だろ。そこでも首席だったって聞いたぜ」

「凄いな」

「実力だったら、だろ」

「あの顔、男か、あれ」

「けど何だってヴェルナーがわざわざ軍に入るんだ？」

好き放題に囁き交わされる会話が、途切れ途切れながらも俺の所まで届く。

「確か、長子じゃないだろ、だからじゃないか」

「どっちにしろ、お遊びだろう。厭きたらすぐ辞めるさ」

准将が咳払いをし睨むと、彼等は慌てて顔を伏せ、囁き声はさつと静まった。

ただ、それは俺にしてみれば意外な反応と言う訳ではない。どこにいたところで同じような会話は常に交わされる。ここでもまた、少しは、いや、大部分は親の七光りと思われているのだろう。

だがいかに幹部候補とはいえ、まだ入りたての兵が大將への面会を許されたのだ。それは軍の上層部も、父の存在を大きなものと捉えているという事だ。

相手が勝手に俺の上に父の姿を見る事には慣れている。それをすると言う方が無理な話だ。だが、王の直下である近衛師団ですら、その影に捉われるのかと、多少の失望は覚えた。

そんな事を考えながら、ふと、先ほどのレオアリスの瞳を思い出す。

あの眼の中に、父の影は無かった。

家ではなく、俺自身について感想を言われるのも珍しい事だ。まあ碌

な評価ではなかったが。

前を歩く准将が振り返り、少し怪訝そうな顔をする。

「どうかしましたか」

「いえ。何故ですか？」

「笑っていたので」

笑っていたのだろうか。

「……あまり、気分のいいものではないでしょう」

まだ途切れる事無く続いている視線を見返し、准将は先を思いやるように重く息を吐いた。

「ご心配なく、問題は起しませんよ」

「いや、そういう事では」

「それより、私は新兵ですし、階級も貴方より下だ。そのような言葉遣いをされる必要はありません」

准将は気まずそうに俺を見返して何か口を開きかけたが、再び咳払いをして歩き出した。

自分の隊に加わると、すぐに准将から訓練の説明がなされた。

剣、組み手、騎乗戦、布陣演習。剣の型から複数単位、軍としての動きなど、一日の内に多岐に渡った訓練が行われている。

意外だったのは、想定していたよりも手合わせをした感触が薄かった事だ。目上の兵と組んでも、さほど手応えがない。精鋭と言われる近衛師団の兵がこの程度なのかと、再び軽い失望を感じはしたが、その事を重んじて師団を選んだ訳でもない。

その日の終わりには、相手に合わせる事を選んだ。敢えて負けて見せる事すらあった。

首席という事に相手もそれなりの想定をしていたのだろう、怪訝な顔をする者もいたが、ただでさえ「家」の大層な看板を背負っている身としては、それなりに埋没した方が面倒事は少なくて済む。

必要なのは彼等の関心ではなく、どちらかと言えば無関心の方だ。

ただ近衛師団という組織にある事、俺にとってはそれが当初からの目的だった。

俺の生まれたヴェルナー家は、いわゆる名家と呼ばれる、古い歴史を持つ家だ。

父ヴェルナー侯爵は王国の政務を取り仕切る内政官房の副長官の役職にあり、また十ある侯爵家の筆頭を努める。それ以上の位にあるのは、四大公と呼ばれる四名の公爵と、王だけだ。

兄弟は五人。六歳離れた兄とその一つ下の姉、五歳離れた妹、それから――双子の弟。

兄弟は幼い頃から個々の館で、養育官によって育てられた。それぞれに生母は違い、兄と姉、俺と弟の母は既に亡くなっており、妹の生母が現在は彼女と同じ館で暮らしている。

同じ家にながら、兄弟達と親しく言葉を交わした記憶はさほど多くはない。何か儀式などがある時程度だろう。姉は早くに他家に嫁ぎ、兄は後継者としての教育を受ける為、常に周囲を多くの養育官に囲まれており、兄弟達と食卓を伴にするという事も殆ど無かった。

それは父とも同様だ。まず顔を合わせる事が月に一度あればいい方で、下手をすれば半年振りなどという事にもなりかねない。物心ついて以来、父と交わした会話の回数を数えるのは容易い事だった。

それに不満が無かったかと問われれば、当初はあったのかも知れないが、まあ慣れてしまえばたまに会う事の方が面倒になる。

兄と他の兄弟達との、父の接し方の違いは明らかだった。父は跡継ぎである兄にしか関心のない、そんな男だった。それ以外がいる事を覚えていないのかすら、怪しいものだ。

それ程の繋がりの薄さを知っていれば、多くの者が俺の「家」などに要らぬ気を回す必要も無かっただろう。

そうした状況の中で、双子の弟だけは同じ館で育った。十を数えるか数えないかという頃までの話だ。

生まれつき胸が悪く病がちだった弟は、日の大半を寝台の上で過ごす事が多く、その分というのか、思慮深く穏やかな性格をしていた。

いつも誰かしらが傍にいる事を好み、俺は良く彼に請われてその寝台の脇で書物を広げていた。彼がするとりとめもない話に頷き、意見を交し、求められればその日にあつた出来事を語る。

とはいえ、俺もまた殆ど館を出る事もなく過ごしていたのだ。それほど日常に変化がある訳ではなかったが、それでも弟よりは日々の事を語る事が出来た。

彼は些細な事でも感心し、良く笑った。笑う程の大した事があるとも思えず、何がそれほど面白いのか、俺には分からなかった。

「だって面白いじゃないか」

それを問うと、彼はさも当然のようにそう答える。

「毎日同じ事の繰り返し返しの、どこが面白いんだ？」

「それだってちよつとずつ違う。生きてる以上は」

「……」

「ロットバルトは余り笑わないよね。だから僕がその分笑ってるのかも知れない。双子だから。——でもそうすると、僕が笑すぎるから、君が笑わないのかな」

「——別に。楽しかったり嬉しかったりすれば、俺だって笑う」

「もつと笑った方がいいと思うよ。せつかくすごく綺麗な顔してるんだから、笑ったらみんな喜ぶよ」

「自分も同じ顔だって判って言ってるのか？」

呆れてそう返すと、ふと彼は、言い表しようのない表情を浮かべた。

「僕もそんな顔をしてるかな」

「……俺みたいになる必要はない」

「そういう意味じゃないよ」

彼の言いたい事は判る。俺達はまるで鏡に映したように似ていたが、彼の内部を蝕む病は、その表面から生気を奪っていた。

「ロットバルトは自分の顔が嫌いなのか？」

「別に」

好きでも嫌いでもない。単にこれが俺だというだけだ。

館で過ごす中で、俺は様々な事を学んだ。政治、経済などの学問一般。護身の為の武術。学ぶ以外にすべき事が無かったというのが正しいが、敷地内には必要なものは大抵あり、わざわざ外に赴く事もない。

教師達は父である侯爵の我が子等への配慮だと有難そうに言っていたが、単に一々考えるのが煩わしかっただけだろう。

ただ確かに、この状況が恵まれているのは確かだ。不満を差し挟む余地はない。

「そう言えば、あれはどうなったの？」

何の事かと顔を上げると、弟は寝台の上で枕に背を預けたまま、剣を抜く素振りをしてみせた。

「この前、上手くいかないって言ってたやつだよ。斬る時の力の入れ方が良く判らなくてさ。こんな感じ？」

まだ一度も剣を持った事のない弟は、何回か剣を振る真似をしてみせて、やはり感覚が掴めないのだろう、自分でも首をかしげながら寝台の脇に座っていた俺の顔を見下ろした。その顔には微かな憧れの色が見える。

「……まあ悪くはないと思うが……斬る瞬間だけ握り込むんだ。今のところそれが一番いい」

「なんだ、もう解決しちゃったんだ。一緒に考えようと思ったのにな」  
つまらなさそうに枕に背中を預け、それから穏やかな瞳を天井へ向けた。

「でも、やっぱりすごいよね」

「何が」

「出来るまでやるもんね、君は。負けず嫌いだしさ。何日かかった？」  
彼は人を褒めるのが上手いとも言うのか、彼の柔らかい口調でそう

言われると、理由は無くても自分はそうなのではないかと、そんな気にさせられる。

「……ひと月と十日」

「ずっと？ それだけやってたの？」

俺が頷くと、驚き、呆れた後、彼は可笑しそうに笑った。

父に会う機会など殆ど無いにも関わらず、弟は父の事を慕っていた。

「父上にお会いしたいなあ。いつもお仕事で、この間の僕らの誕生日にも来てくれなかった。せつかく九歳になったのにな」

誕生祝など大して意味のあるものではないが、一応の祝いの席でも、これまで父が顔を見せた記憶はない。それを言おうかとも思ったが、彼がひどく淋しそうな色を浮かべていた為、さすがにやめた。

「仕事があるんだ。仕方ない」

「だって兄上とはいつも食事を一緒にされるじゃないか」

「兄上は跡取りだろう」

「だからって兄上ばかりずるいよ。——ロットバルトは淋しくないの？」

「別に」

正直に言えば、俺には父を恋しがる弟の心情が理解できなかった。

年に数える程しか会う事の無い相手を、どうしてそう慕えるのだろう？

同じ時間を過ごしながら、考え方がこうも違ってくるのは不思議だ。

生来の性格が為せるものか、彼が病を得て不安を感じていた分、より多くの愛情や関わりを欲したのか。

「僕は大きくなったら絶対、父上のお役に立てるようになるんだ。そうしたら父上も喜んでくれるよね」

「——確かに、役に立つようになれば喜ぶだろうな」

事実を言ったまでだが、彼は悲しそうな顔をして、寝台の脇に寄りかかって座っている俺を見下ろした。

「でも、じゃあロットバルトは何の為に勉強してるの？ ずっとずっとやってるだろ。剣だって、手の皮が剥けるまでやってるのを知ってるよ」

「別に。——暇だから」

弟はすっかり頬を膨らませ、寝台の上で肩を落とした。

「ロットバルトは冷たい」

「お前が期待し過ぎなんだ」

言葉も無く黙り込んだ為、少し冷たく言い過ぎたかと思った。そんな時はいつもそうであるように、また落ち込むだろうと思っていたら、彼は瞳を見開くようにじっと俺を見て、それから嬉しそうに笑った。

何故笑ったのか、その時には聞かなかった。

だからもう、彼があの時何故笑ったのかを、知る事はできない。

弟の病が進行し、もはや手の施しようもなくなったのは、それから一年も経たない、まだ彼が十年も生きていない頃だった。

季節は冬へと差し掛かっていた。王都の冬はそれ程寒いものではないが、それでも冬の冷気は身体に堪える。

主治医は少しでも長らえる為に、空気の暖かい所で療養する事を勧めた。幸いヴェルナー家の別邸は各地にあり、南方の一つに弟を移す事になった。俺まで行く必要はなかったが、弟がそれを望んだ為、俺も共に別邸へ移った。

移った当初の四、五日は、弟の容態はゆるやかに快方に向かっていくように見えた。寝台の上に起き上がる事もできたし、窓から外に広がる湖を眺める事もできた。

「湖に船を浮かべて乗ったら楽しいだろうね。ねえ、ロットバルト、乗って見せてよ。僕はここで見てるから」

弾んだ声とは裏腹に弟は幾度か小さく咳き込み、俺は外気の流れ込む開け放されていた窓を閉ざした。弟に視線を戻すと、彼は名残惜しそうに窓の外へ目を向けていた。

「……自分で乗ればいいだろう。体調が大分良くなって来てる。あと数日もすれば乗れるさ」

「君が見せてくれれば、それでいいよ」

もう一度、そんな事は自分でしろと、そう言って俺は部屋を出た。

廊下から外を眺めた窓越しに、陽を受けて碧く輝く湖が館の前面に広がっている。

深く穏やかなその色は、彼の瞳のようだと、ふと思った。

弟の容態が急変したのは、その晩だ。

苦しそうな息の下から、弟は何度も父の名を呼んだ。

俺は生まれて初めて、父に宛てて手紙を書いた。ただ言付けるだけで良かったのにそんな事をしたのは、父が手紙によって或いはここに来る気になるかもしれないと、そう思ったからだ。

弟が貴方に会いたがっている。せめて一目、顔を見せて欲しい、と。

急使を立てたから、手紙はその晩の内に王都に届いただろう。

弟には父はすぐ来るだろうと、そう言った。どれ程の痛みがその身の裡にあるのか、俺には感じ取る事すらできなかったが、苦しみに耐えながらも彼は嬉しそうに笑った。

その隣に立ったまま見下ろすと、弟の蒼い瞳と目が合った。色の失せた顔の中で、その瞳だけが熱を宿している。

周囲では医師達が慌しく行き来していた。逼迫した空気の中で、弟の姿だけが静かだ。

立ったままの俺を見て、弟は僅かに笑みを浮かべた。

「——僕が、一番、気掛かりなのは」

「止める」

断ち切るように遮ると、弟は口元を緩ませる。

「まるで、今にも、君が死にそうだ」

その方がマシなんじゃないか。

どう考えても、俺より弟の方が価値が高い。俺には何も面白いとは思えない。父に会いたいたいと思わない。

そうしたい方が、残ればいいのだ。

何故そうはならないのだろう？

弟は黙ったままの俺に構わず、天井に視線を向けたまま、押し出すよ

うに言葉を紡ぐ。

「僕が一番、気掛かりなのはね——この先、君がどこで、……夜を、過ごすんだろうって、事だ」

「……どこでだって、俺は居られる。お前が居て欲しいからだろう」

「そう、だね……」

弟は曖昧な笑みを浮かべた。

もつと何かを言うべきかと言葉を探したが、口を開く前に彼はひどく咳き込み、医師達はその周りを取り囲んだ。彼らに押されるようにして退いた俺を、色の褪せた視線だけが追う。

掠れた呼吸と共に押し出される微かな声は、それでも俺の耳に届いた。

「……君が、笑うように、なるかな……」

「——言っただろう。」

何も代わる必要などない。

彼はただ、笑った。

その後は、もはや会話も交せる状態ではなく、途切れ途切れの荒い呼吸だけが、彼の命がまだある事を告げていた。

俺は彼がいつもそう望んだように、寝台の横に背中を預け、床の上に座った。

時折物音に耳を澄ませる。

けれど深い夜の中で、馬車の車輪が石畳を弾く事もなく、飛竜の羽ば

たきが夜風を切り裂く事もなかった。

夜更けを過ぎてても、父は姿を見せなかった。だがもう、うわ言を言う

事もない弟には、父が来たところで判るまい。

俺はただ、弟の手を握るでもなく、寝台の脇に座っていた。

夜明けが室内に忍び込む頃、弟は静かに息を引き取った。

夜明けが室内に忍び込む頃、弟は静かに息を引き取った。

完全に夜が明けきる頃には、館の中は慌しさに包まれていた。走り回る足音と、啜り泣く声が交じる。

「――葬儀の準備をする必要があるな。父へは何と？」

「お亡くなりになった事をお伝えしましたが……、ご指示は、まだ……」

「なら、別にいい。進めてくれ」

誰もが、何を言うべきか分からずに、戸惑った表情を浮かべている。

俺達の養育官は、慎重に言葉を選んで俺を諭した。

「お父上はお忙しかったのでしよう」

「そうだろう。」

「余りお父上を責めてはなりません。……クラウド様を、ご自分のお子がお亡くなりになって、お心を悼めておられるはずです」

まあ、そう思うのが一番いいだろうな。

ただ領いて、弟の部屋を出ようとした時、朝日を浴びて光る碧い湖が視界に入った。

ゆらぐ深い色は、生命を満たした柔らかいあの瞳のようだ。

「……船はあっただろうか」

「は？ い、いえ、ございますが」

「なら、少し乗ろう」

もう見る事ができる訳ではなかったが、多少は喜ぶのだろう。

「まだ十にも満たぬというのに、あの方は冷静で、眉一つ動かされん」

「あの方が一番、侯爵に似ておられるのかもな」

「泣いて差し上げた方が、クラウド様は喜ばれたでしょうに……」

漏れ聞こえる声はただ煩わしい。

葬儀は身内だけでひっそりと行われた。

父の姿は無かった。

鬱陶しいくらい、晴れた日だった

長じるにつれ、俺はそれなりに自分の能力を育てていった。

吸収できる限りの知識を吸収し、武芸を学んだ。

王立学院に入ったのは、交渉力や社交力を身に付けるためだ。

館に用意された教師達だけでも、ある程度の知識を得るには十分だったが、十五を数える頃にはそれでは物足りなくなっていた。何よりこの

狭い世界の中では他者との接触の機会はほとんど無い。

知識を得る事よりよほど重要なのは他者との交渉術だが、ここではそれを学ぶ術や機会は無かった。

寮を希望したが、それは認められなかった。

だが院の試験は無難に抜けられたらしく、その年の総代として式典で挨拶を行う事になった。

壇上になると、数百の目が一斉に注がれる。それは生まれて初めての

緊張を覚えた瞬間だった。無事に宣誓を終え、壇を下りて自分の席に戻った時、後方の席から密かな声が洩れた。

「総代だって？ さすが、ヴェルナー家の子息は扱いが違うよな」

静まり反っていた場内の空気が騒めき、教師達の慌てたような叱責の聲が幾つも上がった。

たったそれだけの言葉で、彼は席を立たされ、その日の内に除籍された。俺に対しては、副学院長がわざわざ謝罪の言葉を告げに来た。

呆れた対応を通り越して、笑うべきだろう。知を信奉する組織が、まともな判断とは思えない。だがそう告げても、彼等はひたすら恐縮するばかりだった。

俺が、自分の家が――自分が言うべきか、他者からどう見られるか、初めて突き付けられたのがそこだ。

これまで外部とは没交渉のまま館の中で過ごし、自分の置かれている

場所を異質なものとして認識する事など無かった。

反目と、追従。

それは学院にある期間、ずっと消える事なくあった意識だ。

歓迎できる反応では無かったが、彼らが俺の背後に、在りもしない父の影を見て様々な態度を見せるのは、いっそ面白かった。

誰もが、俺の上に父、ヴェルナー侯爵の影を見ている。

『ロットバルト・アレクス・ヴェルナー』？

そんなものは単なる侯爵家の一部だ。そこに見いだせる価値などない。だが、ヴェルナーに生まれた以上、そのくびきから逃れて個として立つ事は不可能に近いと、俺は次第に自覚するようになった。

反目する者、お世辞を並べたてる者、俺に近づく者の大方はそのどちらかに別れた。ただ、近づいてくる者は少ない方だ。それ以外の大勢は、ただ俺との関わりを避けるように遠巻きにして眺めていた。

反目と追従であれば、どちらかと言えば、反目される方がまだまじだった。時に拳を交えるような場所さえ、父の影は消えなかった。

当初は苛立ちも覚えたが、次第に俺は、ただ受け流す事が一番手っ取り早く、問題も少ないと学んだ。まあそれも交渉術の一つと言えなくもない。

いつだったか、弟が言ったとおり、幸いこの「顔」はただ笑むだけ。かなりの面において問題は回避される。家柄にしる、容姿にしる、使おうと思えばそれなりに役には立つものだ。

結局それはどれも俺自身の能力によるものではなかったが、周囲はそんな事は気にはすまい。

王立学院に入って数ヶ月が経過した頃からか、館で父の姿を良く見かけるようになった。朝食の席に前触れも無く現れる。

特に何かを話す訳ではない。俺も話したい事は思い付かなかった。まあ世間一般の挨拶程度は交わしただろう。それ以外はただ黙々と食事を進めるだけだ。莫迦らしい事この上ない。

「お父上は、成績優秀な貴方を喜んでおいでなのですよ。学院での成績を常に気にされておいでです。学問も武芸も首席でいらっしやるから、誇らしいのでしよう」

俺から父に成績を報告した事など無かったが、おそらくは学院から報告が上がっているのだろう。

次第に来訪の回数は増え、当初は朝食だけだったものが、時折晚餐の席にも現れるようになった。忘れられたようにしんと静まり返っていた館の中が、その度に活気を取り戻していく。

父の意識がどこへ向いているのか、それをこの狭く深い世界の中で、誰もが息を潜めて注視していた。

丁度その時期に、敷地内の庭園で偶然兄と行き合った。そこは中央の庭園でもそれぞれの館に面したものでなく、家の者が余り訪れない、裏門の近くにある庭だ。

兄は数名の侍従を連れ、植え込みの合間の整えられた小路を正面から歩いてくる。

俺は脇に避け、兄が通り過ぎるのを待った。

だが、次第に近づいて来るにつれ、このまま札を通して過ぎるのを待つか、それとも言葉を掛けるべきか、当然のごとく迷いが生じた。

兄から言葉をかけない限り、下の者から話し掛ける事は通常有り得ないのだが、随分と長い間、兄とこれ程近い距離で顔を合わせた事はない。尤も、会話の内容など思い付かないが。

すぐ手の届く位置まで、兄が近づいて来る。伏せた面を上げようか、尚も迷っている間に、兄は俺の横を通り過ぎた。

軽く息を吐いて顔を上げ、歩き出そうとした時、兄の声が聞こえた。「今のは何という名だったか」

侍従達の間に、追笑が洩れる。

「貴方の弟君ですよ」

「ロットバルト様でしょう」

「ああ——」

兄は足を止めも、振り返りもしない。

「死んだのでは無かったか」

「滅多な事を仰いますな」

「そうか？ 同じ顔が二つもあつて、判りにくかったからな。まあどちらでも大差はない」

兄と侍従達の密やかな笑いが緑の中に散る。

一瞬膨れ上がった怒りを押し留めきれず、俺は彼等の方へ振り返った。視線の先で兄も振り向く。

全く似ていないのは母が違うからだ、それ以上にそれが俺達の距離なのだろうとさえ思えた。

怒りは急速に冷める。それ程に遠い距離にあるのなら、発する言葉は届く前に散り、意味を無くす気がした。

兄は何を思ったのか、俺の方へ数歩歩み寄った。俺が儀礼的に頭を下げると、やはり上辺だけの笑みを浮かべる。

「久しいな、ロットバルト。健勝そうで何よりだ」

「兄上におかれましても。日々のご活躍は聞き及んでおります」

「学院では、大層優秀だそうだな。私も聞くにつれ、誇らしい思いでいる」

「恐れ入ります」

「お前も、いざれ内務に進むのだろう？ 私の下に来るといい。働き振りが楽しみだ」

そう言つて一つ笑うと、俺が顔を上げるのを待たずに兄は再び背を向けた。侍従達を後に従え、庭園の外へ消える。

息を吐き、反対方向へと歩き出しかけて、それまで黙って控えていた養育官の悔しそうな顔が目に入った。

「どうした？」

「いかに兄君のお言葉とはいえ、同じ侯爵家のお子に対して、あの侍従共の無礼さは目に余ります。貴方に対して、道を譲りさえしないと」

心底憤っているのか、声は微かに震えてすらいる。

「……長子以外は侯爵家には無くても変わらない。気にするだけ無駄だ」  
「そのような事を……！ 第一、侯爵がお館へいらしている事も分かつていての態度なのでしょうか」

だからこそそのあの態度なのだろう。それはこの屋敷の中での全ての中心だ。

まあ彼が憤るのは判る。弟はこの養育官を慕っていた。  
もう一度庭園の入り口に視線を投げ、俺はその場を離れた。

内務へ進めと、父がそう言ったのは十八歳を過ぎ、三年間の院での学業の修了を間近に控えた頃だった。その頃には、父が晚餐を伴にするのは兄ではなくなっていた。

「……まだ私は、進むべき方向を決めてはおりませんが」

「お前が決める必要はない。私がお前に相応しい地位を用意しよう。お前はヴェルナー家の誇りだ。兄よりも、このヴェルナーを繁栄させるだろう」

相応しい？

相応しいのは俺ではなく、ヴェルナーの子息にだろう。

屋敷の内部は、数年の内に大きな変化を見せていた。

「本日も面会を求める者が複数ございました。全く、調子のいい者達が多い」

後半は独自に近かったが、最近常にそうした憤りを見せている養育官を眺め、彼が示した卓の上に視線を向けた。

「お笑いになっておられる。そうでしょう、これなぞ、いつぞやの侍従の一人ですぞ」

不快そうな響きの中に僅かに勝ち誇る色があるのは、それがいつか庭園で兄の横にいた侍従からのものだからだ。そこに積まれた書状や品々

の差出人には、兄に近い立場の者の名も幾つか含まれている。

父の態度の変遷は館の内部にも確実に伝わって、彼等の関心の舞台はいまや二つに別れていた。

「どのようなさいいますか」

「放っておけばその内飽きる」

彼等の予測する方向には事態は進まない、遠からず理解するはずだ。父の身勝手に付き合う気は全く無い。

俺が近衛師団を選んだのは、軍の役務に興味があったからではない。

近衛師団は王直轄の組織だ。師団の任免は王が決定する。例え四大公と言えど、師団に直接口出しする事はできない。

あまり他者に話せた理由ではないが、単に俺は『ヴェルナー』という枠の中から抜け出したかったのだろう。それができる場所なら、要はどこでも良かった。

子供じみた思考だと、自分でも思う。

「近衛師団を志願したというのは本当なのか」

父は、とんでもなく馬鹿げた事をしでかしたとでもいうように、俺の顔を見るなり声を荒げた。内政官房の副長官として、長年内政を動かしてきた男だ。その血を受けた者は当然の如く、自らの意図のままに動く事を信じて疑わない。

その驚き憤る様は、中々に面白かった。それだけで、軍を選んだ価値があるというものだ。

「ええ。先日試験を受け、ちょうど採用の通告を受けた所ですよ。幹部候補での採用との事です」

「何を考えている」

「ヴェルナーは軍での基盤は弱い。今現在、正規軍に数名は在籍してい

るものの、誰も軍の要職にはないでしょう。軍内、特に近衛師団に確たる繋がりを持っておく事は、この家にとつても有意に働くと思いませんか」

「だからと言ってお前が軍になど入る必要はない。今からでも内務に進め。お前の席は既に用意してある」

くだらない。思わず笑い出しそうになる口元を堪え、目の前の父の顔を眺めた。濃い髪の色は、俺とは違うものだ。目の色だけが僅かに血の繋がりを感ぜさせる。

「既に兄上がおいでだ。その為に様々な知識を身に付けてこられた。おまかせしますよ」

父の声は苦虫を噛み潰したように、だが僅かに、低くなった。

「ロットバルト。私はあれよりそなたに期待しておる。侯爵家は」

「それでは、兄上は納得されなんでしょう。跡継ぎとして彼を育ててきたのは貴方だ」

父にとつて、ただそれだけの為に、兄は存在していたと言ってもいいだろう。

最近時折眼にする兄の顔には、焦燥と苛立ち、そしてどこか不安定な精神が伺えた。

それに——父は気付いていないとでも言うつもりだろうか？

「誰を跡継ぎにするかは私が決める。お前達の口出す事ではない」

一瞬だけ、俺は拳を押さえ込むのに苦労した。

「——熟考されるべきですね。余計な諍いを増やす必要はありません」

それ以上会話をする気にはなれず、呼び止める父の声を無視して、俺は席を立った。

隊士には王城の第一層内に宿舍が割り当てられ、そこに入るのが原則となる。家を慮ってか他の兵達との関係を考えてか、無理に入る必要はないと入隊時に副将から告げられたが、俺にとっては宿舍にある方が有難かった。

呆れる程手狭な部屋ではあったが、幸い宿舍は皆個室で、慣れればそれなりに落ち着ける。父がそれに納得するはずは無く、一度となく使者を遣したが、それは訓練を理由に追い返した。

尤も、ただ言い訳にただけでもない。訓練は早朝から始まり、日中を通し、夕刻に終了する。悠長に抜け出す暇などないのは事実でもあった。

小隊の役割は戦術を組み上げるといふより、与えられた役割を完璧にこなす事に重点が置かれていた。全体の連携はもちろん必須条件ではあったが、それよりも置かれた状況のその場その場で、上が組んだ戦術の中で動き、かつ自軍を有利に導くために、個々が対応していく。訓練に於いてもそれは変わらない。

俺が好んで身に付けていた剣技は他者と剣筋が異なる。鞘の中で剣を走らせ、その速度を剣に乗せる。一瞬にして相手を切り裂く、その鮮烈さが気に入って身に付けたものだった。

ここでは必要ないと分かってはいたが、一度だけ、そうやって剣を抜いた事があった。第一・二小隊を束ねる少将との手合わせの時だ。

訓練では時折、模範の手合わせを隊士達が揃って眺める、見練が行われる。基本的には小隊を纏める准将と経験豊富な隊士などが努めるが、その日は一隊と二隊、二つの小隊の少将が剣を持った。

「今日の見練はオルソンかよ」

「めんどくせえ」

「負ければ負けたで煩いし、下手に勝ちでもしたら後が厄介だしなあ」

演習場の中央に立つ少将を前に、隊士達の押し殺した囁きがあちこちで洩れていた。

少将は小柄な、少し神経質そうな男だ。気に入った部下とそうでない部下への態度の差が明白で、隊内からの信望はいいとは言えない。

准将の方が信頼は厚く、次の人事で二人の立場がどう変わるかは、隊士達のもつばらの感心事のようだった。

「ヴェルナー一等官、貴方はどう思われます？」

ふいに隣から囁き声が掛けられ振り向くと、隊士の一人が頭を下げ口元を隠すように俺を見上げていた。良く少将の周囲で見かける男だ。

「……どう、とは？」

男は周囲を憚るように見回し、更に声を潜めた。

「次の人事です」

俺自身は少将の能力を知っている訳ではないが、少将の印象は他の隊士達とさほど違いは無かっただろう。初日から何かと声をかけてきては、明らかに背後の家を見ているのが判る伺うような表情を見せていた。それでいて声だけは居丈高で、正直話しかけられて有難い相手ではない。確か、学院の教授に似たような者がいたはずだ。

ともかく次の人事で兵達の言う通りの異動があれば、そうした隊士達の不満を汲み取る耳を上層部が持っている証であり、組織として健全な状態だと言える。

俺が答えないままでいるのを見て、男は素早く言葉を継いだ。

「……貴方がオルソン少将に口添えをされるかで、結果は随分変わるでしょう。どうか一言、」

「誰に？」

隣の男は少し困ったように曖昧な表情を浮かべている。

「それは、もちろん……」

「王にですか。それは難しいな。残念ながら私は職務上、王と直接接見を得られる立場にはない。一等官といってもその程度ですよ」

笑みを向けそう言うと、男は気まずそうにもう一度笑った。

「いえ、それは」

「それとも大將に、と言うのであれば比較的可能かも知れませんが、あの大將がそうした事を好むようには見えませんね。余計裏目に出るので

は？」

「いや、いやいや、ヴェルナー殿、」

男は周囲を見回し、それから更に言葉を継ごうとした時、准将の声が響いた。

「ヴェルナー一等官、前へ」

唐突に呼ばれて、俺は改めて正面に視線を向けた。少将が広場の中央に立ち、杖代わりに剣を身体の前に立てている。

「オルソン少将との手合わせだ。前へ出よ」

准将から二度目に呼ばわれ、漸く自分が指名されているのだと気が付いた。周囲が意外そうな響きを含んで騒めく。隣の男は満面に笑みを浮かべ、それを俺に向けて頷いてみせた。

「これは、良い機会ですな、ヴェルナー殿。オルソン少将はずっと貴方を買われておられる」

「……買うべきところが、私にありましたか」

「いやいや、」

男は何か言おうとしたが、周囲の隊士の目が向けられているのに気付いて口を閉ざした。訝るような視線が集中している。

相手がどうであれ、ここで見練の模範演習者を選ばれるという事は一種の評価であるらしい。大した技術も見せていない俺が選ばれるのは自分でも意外だったが、周囲の隊士達もそれは同様のようだ。

「ヴェルナーか、まあ……」

「大した腕じゃない」

「オルソンに気に入られてるんだろうよ」

「あの顔だしなあ」

「まあ、まあ家だろ。次の人事に有利だ」

囁き交わす声を咎めるように准将が咳払いをし、一旦は小さくなった。「ヴェルナー一等官、どうした」

辞退すべきかとも考えたが、それも理由を付けるのが面倒くさい。剣を取り、隊列を抜けて中央に進み、少将の前方に立った。一礼し顔を上げると、少将は鷹揚に笑って頷いた。

「そう緊張する事はない。尤も首席の相手が私に勤まるか判らんが」

背後の隊列からいくつか失笑が洩れる。それで自らの優位を示せたと思っただのか、少将は一度は満足そうな笑みを浮かべたが、俺が黙ったままなのを見て不快そうに眉をひそめた。

准将の合図と共に剣を抜く。

さすがに少将の位を持つだけあって、剣筋に無駄が少なく、相応の使い手である事は伺えた。ただ手合わせだけで言えば、確かに一隊の准将の方が上を行くに違いない。

数合剣を合わせた後、俺は剣を鞘に収めた。

「何を……」

准将が制止の為に手を上げるのに構わず、少将が剣を振り切った瞬間に合わせて、鞘に収めた剣を放った。

もともと殺す事が目的な訳ではなく、小隊で支給された剣は諸刃で抜き打つには向かない。それだけに全く速度も出ず、首を撃つ手前で剣は止めたが、周囲は一瞬息を飲み一斉にどよめいた。

どよめきはそれ自体がまずい事のようにさっと静まった。だがそこに含まれたものを感じ取ったのも相まって、少将は束の間呼吸を失って顔を強ばらせた後、咄嗟には言葉が出て来ない程の剣幕で怒鳴り出した。

確かに不遜ではあるだろう。だがそれなりの機会だ。この剣で実際にどこまで使い物になるのか知っておきたかった。

その場で侘びて剣を収めると、少将は途端に気まずそうな色を浮かべた。今後注意するようにと曖昧に口の中で呟いて、素早く背を向けその場を離れる。様子を見ていた准将は、額に汗を浮かべ、俺と去っていく少将とを交合に眺めた。

「今のは、少しまずいだろう。オルソン少将は、ああした事を気にされる方なのだ」

「……機会を見て、もう一度お詫びしますよ」

「それがいい。……剣の方も……多分君が幼少から学んできたものだとは思うが」

少し気を回しすぎだろうとは思ったが、軋轢を受けるのはこの男だ。

「ご安心を。まあ、この支給された剣では使いようも無いものです。今後改めましょう」

「ならいいが……」

まだ訓練に関わらず、思い思いに言葉を交わしている隊列へ戻る。

浮かんだ表情からすると、どうやら彼等には複雑な結果だったようだ。俺の立ち位置もあの少将と大して変わらないものかと、我ながら少し可笑しかった。

元いた列に戻ると先程の男は顔を背け、逆に別の数人が顔を上げて笑いを含んだ視線を向けた。

「今のは何という剣でありますか、一等官殿」

「失敗されたようにお見受けしましたが」

周囲には同意の顔と、同意すべきか迷う顔と二通り見える。傍から見ても相当不恰好なものだったのだろうが、自分でも、あの技法を使うくらいなら、錆びた剣を使った方がまだマシだというのが感想だ。

「……見た通りでしょうね」

俺が怒るか反論するかと考えていたのか、彼等は意外そうに顔を見合せた。一人が納得いかなないように身体ごと向ける。

「……その程度で」

「私語を慎め！ 訓練に移る！」

准将の号令が響き、隊士達が一斉に中央へ駆け出し、俺も同様に配置へと向かう。口を開きかけていた隊士もすぐにその波に紛れた。

交わされる囁きや視線を一々気にしなければ、師団での生活はあの閉ざされた世界よりも、ずっと気楽に過ごせた。

日を重ねるごとに、訓練にも慣れ、次第に色々なものに意識が向くようになってくる。

日々の訓練の中で、小隊単位、中隊単位の布陣演習は、最も興味を引いたものだ。

近衛師団では午前中に各小隊の訓練が行われ、その後、午後に布陣演

習が行われる。演習の基本は中隊内でのものだったが、左中右軍一隊ごとに当たる中規模の演習も、三日に一度の割合で行われていた。

それぞれ中隊を率いる中將の志向が隊の動きに現れていて、想定された戦場の状況ごとにその優位が変わる。左軍は広域での布陣を得意とし、中軍は破城、右軍は街地といった具合だ。

だが大將であるレオアリスに関しては、どの局面が得手で、どの局面が不得手なのか、中々見えてはこなかった。

入隊して三度目の、左中右軍が揃った演習の時だっただろうか。

最初押されていた左軍が急に陣形を替え、右軍を押し返す。ふと見上げるといつのまに来たのか、レオアリスが左軍側の物見に腰掛け、指揮を取っていた。その戦術は基本に則っているかと思えば、次には全く予測の付かない動きをする。左軍は瞬く間に右軍の陣を破り、将を押しえて勝敗は決した。

剣士としての認識ばかりが強かったせいだろう、レオアリスが戦術に長けているのは意外にも思えたが、さすがに一軍を預かるだけはあるということだ。ただ、将を押さえて終わりでは甘い。相手の軍を壊滅に追い込む方法はいくらかもある。

だが一度他愛のない言葉を交わしただけで、あの時以降レオアリスと話す機会はなかった。面会を申請すれば、無下に断られはしないだろう。ただその必要性がそれほどあるとも思えず、その考えはすぐに意識の奥へ消えた。

入隊して半月ほど経った頃、小隊の訓練中にふらりとレオアリスが姿をみせた。俺にとっては初めての事だったが、やはり小隊の訓練を大将が視察するのは月に一度程度の事らしく、隊士達の顔には緊張と、喜色が浮かんでいた。俺と剣を合わせていた隊士の剣も、にわかには鋭くなる。レオアリスは訓練をぐるりと見て回り、時折声を掛けては、剣の持ち方や踏み込みなどを直す。その助言は傍目で見ていても的確なものだ。

やがて俺の前まで来ると、暫く手合わせを眺めていたが、僅かだがその眼が細められた。

手を抜いているのが見抜かれたかと、内心身が竦んだが、すぐにその眼は何も言わずに逸らされた。手合わせを続ける俺の横を、無言のまますり抜ける。

微かな苛立ちを覚えた。

俺が手を抜いていると、気付かなかった事に苛立ったのか。

いや、違う。気付いていたはずだ。気付いていながら、興味を失ったように逸らされた瞳。

その後レオアリスの視線が俺に向けられる事はなく、やがて副将と共にその場を去った。

問題を起こしたのは、その日の夕方だった。

訓練を終え、宿舎の自室に引き上げる為に第一層の通りを歩く。

昼間の件が、まだ少し引掛かっていた。

興味を失ったように逸らされたあの瞳に、後悔にも似た思いが浮かぶ。あの場で手筋を変えなきゃ良かったらどうか。ただそうしたところで本来の目的が変わる訳でもない。

ここに居る事だけが近衛師団を選んだ目的だ。問題無く居ること、それだけでいい。

そんな事に考えを巡らせていた時だった。

「今年の試験はずいぶん甘かったんだなあ。あの程度で一等官か。だったら俺はいきなり少将になれる」

夕闇が落ち掛かり、通りには人影は疎らだったが、視線を巡らせると通り沿いの建物の壁際に数人の兵が屯しているのが見えた。

「甘いも何も、試験なんて無かったんじゃないのか？ 特別だろ。」

笑い声が上がる。

苛立ちを覚えない訳ではなかったが、それはこれまで幾度もあった反応とあまり変わりはない。

いつものように無視して通り過ぎればいいと、そう思っていたはずが、何故か足を止めた。おそらく俺自身苛立っていた為だ。

振り返ると、俺が立ち止まるのを予想していなかったのか、彼等は少し躊躇いを見せ、それから取り繕うように刺を含んだ視線を取り戻した。それに僅かな違和感を覚える。

「……何だ？ 俺達に何か用か？ 一等官殿」

人数は五人。同じ小隊の者もいれば、見た事の無い顔もあった。一人は先日の少将との手合わせの後、何か言い掛けていた隊士で、もう一人は先程レオアリスが見ていた時の相手だ。

胃の辺りが僅かに熱を帯びる。

「——用があるのはお前等だろう。言いたい事があるなら聞いてやる。言ってみろ」

必要以上に挑発的な言い方だっただろう。失敗したと、チラリと思っ

た。

行動と意思が矛盾している。

問題なく。たった今まで考えていた事だ。彼等は東の間驚いたように顔を見合せたが、無理矢理笑いを浮かべる。先程感じたのと同じ違和感が浮かび、今度は漠然とその理由が判った。

無理に憤ろうとしているように見えるからだ。

壁に寄りかかっていた二人程が俺に向き直る。

「聞いてやる、だよ。さすが、いい家柄のお坊ちゃんと言う事が違う

ね」

「お偉いお父上に、いつもそう教えられているんだろう」

再び笑い声が上がり、薄暗い通りに散った。

違和感の理由は判ったが、どちらにしる不可解なものだ。敢えて不愉快な状況を作る理由が判らない。

無意味なものに、何故意味を持たせようとする？

自分達が眼にしているものが単なる虚像だと、そう気付けば苛立つ必要もない。

憤るほどの価値があるとは思えない。

溜息をつくとき、彼等は更に身を乗り出した。

「親の七光り野郎が、すかしてんじゃねえよ！ あの程度の剣の腕で、幹部候補だぞ？ 笑わせるぜ」

「家柄がよけりや何でも可能だ。親父の力を勘違いしてんじやないのか？」

「——良く、判ってるじやないか」

だから俺など気にも止めなければいいと、そう言おうかとも思ったが、さすがにそこまでの義理はない。

そのまま踵を返すと、一瞬の沈黙の後、足音と共に追いかけてきた彼等が周囲を囲んだ。

「この野郎、何様のつもりだ！ 俺達を舐めてんのか！？ くだらねえって見下してんだろう！」

最初は無理に理由を作ろうと見えていたものが、今の彼等の上には本気で憤っている色があった。

「……そう思いたいだけだろう」

「それが舐めてるってんだ！」

「ここはためえみてえなお坊ちゃんの来るところじゃねえんだよ！ お父上のお屋敷でおとなしくしてやがれ！」

主張するところが完全に違う。歩み寄れない問題だ。

ただ、この場を事無く収めるには、俺が別の態度を見せるべきだったのかもしれないが、正直に言えば正当性もなく納得もしていない事に頭

を下げられる程、俺も人が出来てはいない。結局、無視して通り過ぎるべきだったということだ。——余計な事は言わずに。

後から考えれば、この時の俺の態度はかなり矛盾しているが、この時点で苛立ちが募っていたのは確かだ。

「——俺がどう言えば納得するんだ？」

「何だとお?!」

「元々納得する気も無い相手に、欲しい答えを言ってやる気はないな」

「——この……っ」

突然振り上げられた拳を、一步下がって避ける。背中に衝撃を感じ、俺は体勢を崩して地面に倒れ込んだ。

後ろから蹴られたのだと気付く。再び笑い声が上がった。

「今日の訓練、上將も呆れて、お前に声もかけなかったじゃねえか」  
逸らされた視線が、再び過った。

苛立ちが一瞬で膨れ上がる。

服に付いた土を払って立ち上がる。さすがにこの状況で、無視して通り過ぎる気にはならなかった。

どうあっても喧嘩を買わせたいなら、買ってやる。

問題なく？

どうでもいい。

「……お前達が何を俺に求めているのか知らないが、そんなものはどうでもいい。相手をするだけ、無駄だからな」

彼等は一瞬、凍りついたように静まり返り、それから顔に血を昇らせて一斉に殴りかかってきた。

避けて下がったところへ後方から攻撃を加えるという戦法なら、ただ前に出ればいい。

正面の兵の懐に踏み込み、鳩尾に拳を叩き込む。咽付いて、男はその場に倒れ込んだ。そのまま空いた一角で身体を入れ替え、すぐ右側の男の脇腹に膝蹴りを入れる。輪は完全に崩れた。

「貴様っ」

打ち掛かってきた拳を左手で受け、そのまま後ろに流す。その力を乗

せ、顎へ右拳を打ち下ろした。

三人が倒れたのを見て、残りの二人が怯えたように攻撃の手を止める。構わず手前の奴の髪を掴み、引き下ろして膝を叩きつけようとした時、鋭い声が飛んだ。

「やめんか！」

膝が頭を打つ寸前で止まる。背後を振り返り、苛立ちは急速に冷めた。副将と左軍中将、そして少し離れた所に、レオアリスが呆れたような色を、その顔に浮かべて立っていた。

すぐこの先が士官棟だった事を、今更ながらに思い出した。

「いかなる理由があるろうと、隊内での私闘は禁じられている。隊規を忘れたか！」

中将が厳しい詰問の声を上げる。俺を取り囲んだ二人は、慌てて平伏した。俺も仕方なく、その場に片膝を付く。

レオアリスは倒れている一人に近寄ると、しゃがみこみ、その顔を覗き込んだ。

「あーあー、こんなにしちまって。骨がいかれてる、法術士を呼んでやらないと。当分眼を覚まさないぞ」

上げられた視線と眼が合った。その瞳には、どこか面白がっているような光がある。

だが、やはり俺に対して何を言う訳でもなく、立ち上がるとそのまま背を向けた。

その夜、俺は所属准将の呼び出しを受けた。せいぜい呼ばれたとしても中将止まりだろうと考えていた為、指示された先がレオアリスの執務室だった事に驚きを覚えた。

重い扉が開かれ、再びその部屋に通される。先日はもぬけの殻だった部屋には、副将、左軍中将、第一・二小隊を纏める少将が並び、一斉に俺に視線を向けた。レオアリスは窓際に置かれた黒檀の執務机の向こうに座り、面倒くさそうな表情で机に付いた左腕に頭を預けている。

諍いの相手は二名だけが既にその場において、彼らの前に膝を付いていた。

正面に向き直ると左腕を胸に充て敬礼し、片膝を付いた。

「第一小隊ヴェルナー、招命により只今参上いたしました」

一番手前に立っていた少将が神経質そうな顔を俺に向ける。数日前の事を思い出し内心溜息をついたところに、案の定、棘を含んだ声が掛かる。

「なぜ呼ばれたか、解っているな」

ばかばかしい。大体、一回揉め事を起こした程度でこれほど幹部が顔を揃えるなど、時間と労力の無駄が過ぎるというものだ。

「夕刻の諍いの件でしょうか」

一応そう答えると、少将は苛立ったように声を上げた。

「それ以外に何がある」

俺としては、だったら聞くなと言いたい所だ。

「……残念ながら、思い当たりませんね」

そう嘯くと、少将は顔を引き曇らせた。執務室の中に、俺の無礼な態度に呆れ返ったような空気が流れる。これは課される懲罰も格上げされただろう、と他人事のように思った。

だがレオアリスだけは、頬杖を付いていた手を口元にやり、僅かに俯いた。笑っているのだ。目ざとく気付いた副将が声に咎める響きを滲ませる。

「上将。お笑いになっている場合ではありません」

「ああ、悪い。続けるよ」

無理やり笑いを引っ込めて、レオアリスは手を払うように振った。

少将は決まり悪そうに咳払いをし、再び俺に向き直った。

「お前が叩きのめした三名は、かなりの重態だ。悪くすれば数ヶ月は通常復帰は叶わない事もあり得る」

「……あの程度ですか？」

今度は少将の気持ちを逆なでするつもりはなかった。本心から驚いたのだ。大して殴ったつもりはない。ただ長引くと面倒になる、手っ取り

早く急所に入れただけだ。多数を相手にする場合はそれが定石だろうし、小隊の訓練に於いても常にそう指導しているはずだ。

だが、少将の声は更に甲高さを増した。

「自分が何をしたか、解っていないようだな！ お前が大怪我をさせた者も、ここに居る者達も、お前から手を出したと証言している」

思わず、口がぽかんと開いてしまった。

俺から、手を出したと……？

横の二人に視線を向けると、彼等は気まずそうに顔を俯けた。

「聞けば、訓練中に剣で負けた事への腹いせというではないか。そのような事で……」

少将の甲高い声はまだ続いているが、俺は怒りよりも落胆すら覚えていた。もし俺から手を出したのが事実でも、一方の意見だけを聞いて責め立てるのはあまりにも稚拙なやり方だ。

これが近衛師団のやり方だとも言うつもりだろうか。他の将校達は何も言わないが、これが小隊を束ねる将というのならたかが知れている。「お前のお父上がおられるからこそ、そうして平然とした顔をしていられるのだろうか」

その言葉に、俺は顔を上げた。相当険しい表情を浮かべたのだろう、俺の顔を見て少将は怯んだように言葉を切った。

「な、なんだ、その眼は……上官に対して……」

「貴方が不本意にも上官なのは十分理解している。尤もこの場に父は関係ない事は、貴方には解らないようだがな」

眼の縁を怒りに紅く染め、少将は数度口をぱくぱくと開け閉めした。

「ぎ、貴様、」

思うように言葉にならないまま、俺に一步詰め寄った時、ふいに明るい声が落ちた。

「本当なのか」

少将の怒りなど、全く知らないというかのような声だった。執務室内の視線が声の主に注がれる。

レオアリスは左手に預けていた顔を上げ、視線を俺に向けていた。

何に対して聞かれたのか瞬時には判らず、ただレオアリスの顔を眺めると、俺の戸惑った様子を見て取り、レオアリスは軽く苦笑を浮かべた。「聞き方が悪かったな。……お前から手を出したのは本当なのかと、そう聞いたんだ」

「俺……、いえ、私は——」

レオアリスの表情に、毒気を抜かれたように苛立ちが消え、俺は思わず口ごもった。

「上将、証言では……」

慌てて言い募る少将の姿に、面倒そうに黒い瞳を細める。

「それはこいつらの言い分だろう。だから俺はこいつに聞いてるんだ」

「しかし——」

厳しい瞳を向けられ、少将はさつと青ざめ拳を握り締めて床を睨みつけた。その姿に呆れの交ざった視線を投げ、今度は副将が俺に向き直る。

「上将に返答せよ。直答を許す」

「——確かに、口論にはなりましたが、手を出したのは私からではありません」

それだけ言って口を閉ざすと、レオアリスは暫くの間黙ったまま俺の眼を見つめていたが、やがてこの件はこれで終わりだというように、椅子の背を軋ませて寄りかかった。

「だそうだ。後は任せる」

「上将、しかし」

レオアリスはまだ言い募ろうとする少将を眺めて、大きく溜息を吐いた。

「俺の見解を言わせて貰えば、こいつが自分から手を出すとは思えない」

訝しげに向けられる顔をぐるりと見回し、最後に俺に視線を向けた。瞳に浮かんだ色に、何かの表情は読み取れない。

「わざと負けるような奴が、負けた事で相手を恨む訳がないからな」

「は？」

副将が理解しかねた顔で、レオアリスの顔を見つめる。

「上将、それは……」

「言ったとおりの意味だ。もういいだろう。下がらせろ」  
面倒くさそうにそう言うと、俺から視線を外した。

その仕草に、俺は演習場でのレオアリスの瞳を思い出した。あの時、俺が手を抜いているのを見抜いていながら、何も言わなかった。

まるで声を掛ける価値などないように。

苛立ちが、再び俺の中に生まれる。

自分でも意識しないままに、言葉が口を付いて出た。

「何故、何も言わないんです」

レオアリスが書類に落としていた視線を上げる。

「……何だって？」

「手を抜いていた事について、何故何も言わないのかと、お聞きしているんです」

「ヴェルナー一等官！ 上将に対して無礼だろう。もう良い、退出せよ」

腕を掴もうとした中將の手を振り払い、俺はレオアリスに視線を向けた。

レオアリスは僅かにその眼を見開いて驚いたような表情を浮かべていたが、やがて溜息と共に手にしていた書類を机の上に投げた。

「……俺があの場合で何か言えば、お前は手を抜くのを止めたのか？」

そう問われて口ごもる。

多分、そうではない。指摘されたとしても、俺はやり方を変えなかっただろう。逆に手を抜いてなどいないと、言い返していたに違いない。

黙り込んだ俺を見て、呆れた表情を浮かべる。

「分からない奴だな。一体何がしたいんだ」

何がしたいのか。

改めて問われれば、その問いに返せる明確な答えなどなかった。ただ、レオアリスのあの表情に苛立ちを感じたのだと、そんな曖昧な答えを返せるはずもない。

レオアリスは再び、呆れたように溜息を吐いた。

「お前がどんな理由で手を抜いているのかは知らん。それはお前自身の問題だ。聞く必要もないな」

そう言うと、再び書類に視線を落とし、今度は顔を上げなかった。

俺と他の二名は、それぞれ三日間の謹慎を言い渡された。それ以上口を開く事は許されず、俺達は退出した。

宿舎の自室に戻ると、狭い室内の寝台に寝転がり、足を投げ出す。

眼を閉じてみても、レオアリスのあの時の瞳の色が繰り返し脳裏を過ぎる。

興味を失って逸らされる瞳。

ただそれだけの事が、何故だか、耐え難かった。

謹慎が解けてすぐ、俺は呼び出された訳でもないのに、レオアリスの執務室に向かった。

近衛師団を選んだのはただの打算からで、元から執着を持つつもりはなかった。だがそこを退く事ができるのかと問えば、情けない事に俺にそれ程の余裕はない。

何よりも、興味を失って逸らされた瞳が、繰り返し俺の中に焦燥にも似た感情を生んでいた。

三日間ずっと俺の意識にあったのは、その焦りだ。

右手を上げ、執務室の扉を叩く。

あの声が誰何した。

名を名乗り面会を求めると、暫くの間後に、入れ、と声が届く。

鼓動が大きく響く。息を整え、重い扉を開けた。

決意を固めて来たにも関わらず、その場に揃っている顔ぶれを眼にして俺は思わず足を止めた。何かの会議中だったのだろう、執務室には副将を始め、左中右軍の中将が全員顔を揃えていた。よくもまあこんな所に入れて貰えたものだ、他人事のような考えが浮かぶ。

彼らの前に片膝を付き何をどう切り出そうかと迷っていると、俺が口を開く前に、机の向こうからレオアリスが声を掛けた。

「どうだった。初の謹慎の感想は」

見上げれば、その顔にはどこかからかうような色が浮かんでいる。

「――感想、ですか」

「何かあるだろう。感想。それを言いに来たんじゃないのか？」

そんななばかげた事で時間を取らせたい訳ではない、と言いかけて、注がれる視線に別の意味が含まれている事に気付いた。

一度、深く息を吸い込む。レオアリスの瞳を見据えるように、俺は口を開いた。

「……三日間、冷静になる機会を頂きました」

将校達は意外そうに顔を見合わせたが、レオアリスは特に表情を変え

る事も無く、それで、と聞いた。

「自分が何をしたいのか、解ったのか」

それを得るために、俺はここに立ったのかもしれないと、ふと思った。深く頭を下げる。

ただ、その問いに返す程の答えを見つけた訳ではなく、結局俺が選択したのは、ある種賭けの様なものだ。

近衛師団が俺に価値があると認めなければ、結局ここにとどまる事はいずれ出来なくなるだろう。

自分の存在価値を軍の中に見い出させようとするなら、何がそれに値するか。

剣ではないだろう。他者を圧するほど抜きん出ている訳ではない。

俺に可能なのは、分野を絞っていくと、あまり有り難くない結論が見えてくる。

おそらく俺は、実際には内務の方が向いている。

だが、近衛師団の中でもそれを求める道はあった。

後から思えばひどく稚拙な思考だったが、その時にはそれが最適だとそう判断したのだ。

「機会を与えて頂けるなら、私に、戦術の考案を任せていただきたい」この発言がどれほど無謀で、立場を弁えないものなのかは、自分でも解っていた。

幹部候補とはいえ、一介の兵がいきなり階級も順序も飛び越えて、部隊の戦術を任せて欲しいなどと、俺が言われる立場だったら笑い飛ばすか、叱責するかのどちらかだろう。

だが、それでも構わなかったし、おそらく他の誰が笑っても、レオアリスだけは笑い飛ばす事はないだろうと、心のどこかで確信していた。

どこにそんな根拠があるのかと言われても、答えられない。ただ、そう思ったのだと、それだけだ。

案の定、周囲の将校達は一様に呆れ果てた表情を浮かべ、口々に叱責の声を上げたが、レオアリスは興味深そうに俺に視線を向けた。

それは初めて、ただ目の前にいる相手としてではなく、俺自身に向け

られた視線だった。

胃の辺りにわだかまっていた焦燥が、静かに消えていく。

「……単なる興味本位、という訳でもなさそうだが。お前に敢えて戦術を任せるだけの理由はあるのか」

「謹慎を命じられる前から、私なりに考えていた事です」

退出しろと怒鳴る副将を片手を上げて宥め、レオアリスは俺を手招いた。机上に広げた陣形図を裏返した指で叩く。

「お前も何度か演習を見ていたと思うが、要はもつと違った戦術があると言うんだな」

「そうです。私なら……」

「ヴェルナー一等官！ 差し出た口を叩くな！」

「いい」

堪り兼ねて俺の胸ぐらを掴み上げた副将を制し、再び机の向うから俺を見上げた。

「それで、お前ならどうする」

レオアリスの上に浮かんだ表情を見つめ、副将は諦めた顔で手を離れた。それまでであった僅かな躊躇いも、向けられる黒い瞳に押されるように消え、俺は向き直ると陣形図を指で差し示した。

「先日は左翼から相手の側面を衝いて破り、敵将を最速で押さえています。しかし、この時点で中央を挟撃すればより高い成果を得られたはずです。他の局面でも——」

今まで見てきた演習の布陣、動き、それに対して自分の考える幾つかの戦術を説明する。

レオアリスは面白そうに、黙ったまま俺の言葉を聞いていたが、ひとしきり説明して俺が言葉を切ると、顔を上げ俺を見た。

「……徹底してるな。なるほど。この戦術がお前の認識と言う訳だ」

立ち上がり俺に向けた視線は、しかし先ほどと打って変わって、ひどく冷やかだった。

「近衛師団の役割を言ってみろ」

不意にかけられた質問に面食らった。入隊の際に繰り返し教えられた

言葉を思い出す。

「——王を守護し奉り、その敵を排撃する事、です」

「その通り」

広い机に両手を付く。

「俺達の役割は、いかに王の兵に損害を与えず、また最速で敵を排撃するかにある。王を守るのが近衛の役目、お前の言うような殲滅戦は必要ない」

その言葉は、根本的な認識が間違っているのだと、俺に告げていた。

投げられた言葉に思わず押し黙った俺の肩を、副将が軽く押しやる。副将や中將達の表情には僅かな変化があったが、その時の俺にはそれに気付く余裕などなかった。

「もう気は済んだだろう。退出せよ。この咎めは追って通告する」

副将の言葉に押し出されるように部屋を出た俺の背に、思いがけず明るい声がかかった。

「また何か思いついたら持って来い。いつでもいいぜ」

弾かれるように振り返った時、目の前で扉が閉ざされた。

課された懲罰は二日間の謹慎及び兵法の論文の提出だった。

軍規に背いたようなものなのだ、もっと重い罰——加えて軍に対する認識の違いを露呈してしまったのだから、それこそ除隊を食らうかある程度覚悟していた為、正直拍子抜けした。

懲罰を告げる為に部屋を訪れた准将は、胃が痛そうに顔を顰めながら長い間小言を並べていたが、半分以上聞いていなかっただろう。本当は除隊にならなかつた事に対する安堵の思いが頭を占め、小言を聞く余裕など無かつたのだが。

どうでもいいと思っていた軍に、いつの間にかこれほど固執している事は、俺自身にとって新鮮な驚きでもあつた。

謹慎の意味を理解していない訳ではなかつたが、その日の午後、俺は宿舎を抜け出した。

論文の方向性を——要は俺の師団に対する認識を改める必要があつた為、少し歩きながら考えたかつたのだ。論法を構築するのは容易いが、一度築いた思論を崩して新たに再構築するのは意外と難しい。

何の気なしに歩いて、気が付いたらあの裏庭に出ていた。どう歩いたものか、士官棟の中庭からでなくともここに來れるのだと、そんな事に僅かに得をしたような気分を覚える。

誰の姿も無い事に何となく期待が外れ、軽い溜息を吐いた時だ。

「謹慎。意味分かつてんのか？」

呆れたような声がかかる。声の方へ眼を向けると、中央の枯れた噴水の陰に、レオアリスが寄りかかって座っていた。

「一応。——貴方こそ、いつもここにいらつしやるんですか」

人の事を言えたものではないが、大将という立場が分かっているのだろうか。だが気にした様子もなく、レオアリスは俺を手招いた。

「時間のある時にはな。大将になったら、周りにいつも人がいてめんど

くさいんだよ」

その声には心底閉口している響きがあつた。確かに、大抵は副将が傍らにいる。しかし軍というものの性質上、それは当然の事だろう。

「いいんですか。それで俺がそこに行つても」

「立ちつばなしでいるか？ どうせどこに行くつもりでもないんだらう。お前は俺に予定がどうのこうのと言う訳じゃないし」

隣を手で示されて、さすがに俺は躊躇った。いくら何でも、そこまで気安く接する事の出来る立場ではない。僅かに考えて、結局少し離れた場所に座る。

座つたものの、何を話せばいいのか困惑した。話したい事はおそらく山ほどあるのだろうが、予期もせず、まったく整理されていない状態で、この差し向かいの状況では気の利いた質問一つ浮かばない。

まあレオアリスにしてみればせつかくの一人の時間だつたのだ。降つて湧いた闖入者に余計な口を利かれるよりは、黙つていてもらつた方がいいのかもしれないが。

実際、俺が傍に座っているのにも関わらず、腕を頭の後ろに組んだまま、噴水の縁に寄りかかり眼を閉じてしまつている。既に眠っているのかもしれない。

何の為に俺をここに座らせたのだと、僅かな不満を感じて覗き込もうとした時、ふいに口を開いた。

「そういえば、さつき内務で、お前のお父上にお会いした」

突然父の名が出されて、ぎよつとレオアリスに眼を遣る。

軍部の将校が内務に赴くのは、戦時でなければ隊の任免の件が主だ。

「お前の事を気に掛けていて、どうしているかと聞くから」

近衛師団に対して、内務の権限で人事が発令される事はある得ない。だからこそ師団を選んだのだ。だが師団自体の決定事項となれば、話は別だ。

「元気だと言つておいた。元気すぎて既に二度も謹慎を食らつてますってな」

思わず額に手を当てる。俺の個人的事情など知りもしないのだから仕

方が無いと言えばそれまでだが、それは一番まずい。ちらりと片眼を開けて俺の姿を眺め、レオアリスは可笑しそうに笑った。

「相当驚いてたな。何かの間違いじゃないかと言っておられた。——お前、家じゃ猫被ってるのか」

笑い事ではない。今回の処分が謹慎で済んで、正直胸を撫で下ろしていたところなのだ。ここで余計な横槍が入って、万が一軍にいられなくなりでもしたら、どう責任を取ってくれるのだろうか。

尤もレオアリスにとっては、そんな事は瑣末事に過ぎないのかもしれないが……。

レオアリスを見ると、もうその眼は閉じられていた。眠ったような表情からは何も伺えない。

再び俺の中に、あの自分でも理解しきれない苛立ちが浮かぶ。

声をかけて起そうかと適当な言葉を捜したが、結局相応しい理由が思い浮かばず、諦めてその姿を眺めた。

改めて辺りを見回せば、午後の陽射しは柔らかく、遮る物もなく注いでいる。

会話一つないその場を、静かに風が抜けていく。

眠っている誰かの隣にただこうして座るのは、一体何年振りだろう。穏やかな——記憶だ。

柔らかい陽射しと、規則正しく聞こえる呼吸。

たった今、俺はあの部屋で、寝台に背を預けて座っているのではないかと、そんな錯覚を覚えた。

師団に配属されてからあった事を話そうか？

多分彼は呆れて笑うだろう。笑って——

不意にその笑みは乱れ、穏やかな呼吸は苦痛を孕んだ途切れ途切れの喘鳴に変わる。

呼吸は次第に細くなり、あるか無いかの掠れた音が耳を打つ。

自分もまた、それと共に、薄れ、微かに、消えていく。

風の音だけが、夜の中を渡って響く。闇に、飲まれ、——呼吸が

止まる。

黒い瞳が俺を捉えた。

急速に、意識が形を取り戻す。

いつの間にか、覆い被さるようにしてその顔を覗き込んでいた自分に気付いた。記憶の中の蒼い瞳と、目の前の漆黒のその違いに、一瞬だけ自分の置かれた状況が理解できなかった。

「——どうした？」

俺の眼を見上げたまま、レオアリスは静かに問い掛けた。

柔らかい陽射しは少しも変わる事無く、この場に降り注いでいる。

深く息を吐いた。

どうかしている。ここは既に、あの夜ではない。

「——いえ。失礼しました」

身を起こすと、レオアリスも合わせて上体を起こし、俺の眼を怪訝そうに覗き込んだ。

今更、というと、冷淡な響きに聞こえるだろう。

だが俺には、未だに、自分がそこに囚われている事が意外だった。

弟の存在を消したいと思っていた訳ではない。むしろ俺にとって彼は、唯一つ、好んで思い返すような、そんな存在だ。

けれど確かに、彼が死んだあの夜を、敢えて振り返ろうとはしなかった。

それは当然だろう。誰しも、近しい者の死を思い出したいとは思えない。

そうではなく、ただ、自分が既に消化したと思っていたあの夜が、未だに少しも変わらずにそこにある事を。

そしてそこから、俺は一步も動けていないのではないかと——そんな

気がした。

封じ込めなくては。

今までのように、気付いていない振りをするればいい。

それで、何も問題などない。

「……いいけど。ひどい顔をしてるな」

その言葉に額に手を当てると、冷えた汗が指先に触れた。漆黒の瞳が、取り繕ったものを見透かすように俺に向けられる。

「——この顔を、そう評価されたのは初めてですね」

レオアリスは呆れた様子で肩を竦めたものの、特に何も問い質そうとはせず、青い草の上に胡坐をかいて座り直した。空いている右手でくしゃりと黒髪を交せる。

その腕に剣を宿すのだろうか、俺は漠然と考えていた。

どんな剣なのだろう。その剣は切り裂けるのか。

何でも？

レオアリスは暫く黙って俺の顔を眺めていたが、やがて小さく息を吐いた。

「あの時ああは言ったが、お前の戦術をそれだけ見れば、あれは十分面白いよな。的確で、容赦がない」

唐突な話題に俺はただレオアリスを見返した。

「……近衛師団で、お前が望む事はあれなのか？」

「——一応三日も考えて出した結論です。そのつもりですが……」

「そうかな」

一度口を閉ざし、考え込むように口元に手を当ててから、視線だけを俺に向ける。

「俺には、お前が何をしたいのか、まだ判ってないように見える」

「……近衛師団へは、率直に申し上げれば、父の許可は得ず自分で選んで入ったんですよ。おまけにこの謹慎だ。十分好き放題やっているとされていますが」

「そうやって笑うと、意味もなく納得しそうだよなあ」

呆れたように呟いてレオアリスはもう一度肩を竦めた。

それから、漆黒の瞳が深い色を湛えて、静かに注がれる。

「——お前はそうやって、自分の望みを殺すのか」

咄嗟に返すべき言葉が見つからず、ただレオアリスを見返す。

返答を待っているのかいないのか、レオアリスは芝の上に胡坐をかけたままの姿勢で両手を後ろに付き空を見上げた。

望み、が。あるだろうか。

俺に？

殺すほどの望みなど、思い付かない。

「お前、結構バカだろ」

唐突に掛けられた言葉に面食らって見返すと、レオアリスは再び視線を俺に戻し、殊更に呆れた表情を浮かべてみせた。

「頭いいヤツってのは考え過ぎるのか、それともお前が特にそうなのか」

レオアリスは俺が返す答えを探せないでいる間も、構わず言葉を継いでいく。

「例えばさ、何であいつ等が喧嘩ふっかけたか、判ってるか？」

「それは——」

「普通怒る。うちの入隊試験は甘くない。皆判ってるんだ、同じところを潜って来たんだからな。口じゃ何て言ってたって、首席を取ったんなら、その通りなんだよ。それで手え抜かれりゃ、舐められてるんだらうって誰でも怒るさ。——お前の事情はどうあっても、ここで奴等は命を張ってる。誇りがあるんだ。それを忘れるな」

それまでと変わらない口調だったが、重く胸の奥に落ちるのが判る。

「——済みません」

言葉に出来たのはそれだけだった。レオアリスは面白そうに笑った。

「何か俺、年上の気分になってきた。まあ、上官だけだな、一応」

俺が口を開く前にレオアリスは立ち上がった。俺を見下ろして笑う。

「さてと、そろそろ戻れよ。ただ御座りな論文出すだけじゃ、下手したら除隊だぜ。それから——何がしたいのか、もうちょっと考えてみるよ」

片手を軽く振ってみせ、士官棟の中庭へと続く蔦の小路に向かう。何かもう少し言うべきかと考えている内に、その姿は垂れ下がった蔦を揺らして消えた。

『望みを』

ふいに、陽射しが翳る。

再び、耳の奥に薄れていく呼吸が蘇る。

自分のすぐ背後、振り返っても見る事の叶わないそこに、明ける事の無い夜が潜んでいる気がした。

七

その夕方、ヴェルナー家から使者が来ていると、准将が俺を呼びに来た。

宿舎の一階にある面会室へ行くと、少将と、見覚えのある男が待っていた。父の秘書官の一人だ。

高圧的な空気を纏うその使者の前で、少将はまるで父本人の前にも立ったように畏まっている。俺の顔を見て安堵の色を浮かべ、慌てて手招いた。

「ヴェルナー一等官、お父上がお呼びでいらつしやる。すぐに行、行かれた方が良い」

横に立つ使者にちらちらと視線を走らせながら、早口でそう告げた。この男は、今俺が置かれている状況を、忘れたとでも言うつもりなのだろうか。

「——私は、大将殿から謹慎を申し渡されている身です。許可なく動く訳には参りませんが」

「そ、それは私からお伝えしておく。とにかく」

少将の言葉を遮るように、使者が前に出る。

「ロットバルト様。父君は至急に、と」

それだけを告げ、当然の判断を待つように、ゆっくりと頭を垂れた。

至急？

腹の底が冷える感覚を覚えた。

その感覚に圧されるように、おそらく、笑みを浮かべたのだろう、使者は訝しげな表情を覗かせたが、少将は安堵の息を吐いた。

「……承知した。仕度をする間、表で待て」

使者の返答を聞く前に踵を返し、廊下へと出る。階段を昇りかけた所で、追いかけてきた少将に呼び止められた。

「ヴェルナー殿」

「——何か」

込み上げる苛立ちを抑えて振り返る。

「先日は、その、私は決して、他意があった訳ではないのだ。ただ、その」

その慌てた気まずそうな表情を眺めながら、よくもこれだけ俺の厭う所ばかりを突いて来れるものだと、いっそ感心すら覚える。

結局のところ、この男にとつて目の前にいるのは俺個人ではなく、ヴェルナーという家の影に過ぎない。

「ああ……申し訳ないが、忘れておりました」

「そ、そうか。……お父上には、」

「……ご安心なさい。例え私が話したところで、あの方は私のそんな話には興味ありませんよ」

安堵すべきか複雑な表情を浮かべ、少将は幾度か小さく頷いた。それを残し、階段を昇る。使者を送る為に宿舎の玄関口に立っていた准将の、物言いたげな顔が視界に入ったが、気付かない振りをして自室に戻った。

軍服の上から、ただ外套だけを羽織る。ヴェルナーの当主に目通りするに相応しい装いではないが、敢えて着替える気にはならなかった。

静かな、吐き気にも似た言い難い苛立ちが、冷気のように胃の中を立ち昇ってくる。

『至急』？

あの父に、至急などという概念があるとはお笑いだ。

どうせ言わんとしている事は想像がつく。使者など追いつ返しても良かったが、それよりもただ、冷えた苛立ちの方が大きかった。

扉を開けようとして、ふと立掛けてあった剣に眼が留まった。軍の支給品ではなく、俺の太刀筋に合わせて打たれた、浅く反った刀身を持つ剣だ。

特に何を考えるでもなく、その剣を取った。

ヴェルナー家は王都の中心部に屋敷を構えている。広大な敷地の中に、当主の館の他に、俺の育った館も含め、いくつもの棟があった。

主の住まう館の長い回廊を歩く。以前そこを歩いたのはいつだったか

と、そんな事を漠然と考えていた。

あまり記憶には無い。同じ敷地内に在りこそすれ、そもそもこの館に足を踏み入れる事さえ、年に数度あるか無いかという程度だ。

既に陽は落ちきり、回廊の両側に張られた硝子の向こうを、墨のようにべたりとした闇が取り巻いていた。

夜気はしんと冷え込み、日中の暖かさとは打って変わって、静かに回廊に満ちている。

聞こえるのはただ、館を取り巻く風の音のみだ。

それから——掠れて行く、微かな響き。

幾度か折れ曲った回廊を進んだ先に、ヴェルナー公爵の、この館での執務室が現れる。

両開きの扉の前で立ち止まり、名を告げると、低い声が応えた。

深く、呼吸を整える。

重い扉を押し開けると、灯りを落とした広い室内の奥、執務机の前に座している影が僅かに肩を揺らした。

広い室内の中央を過ぎた辺りで立ち止まり、執務机の正面に向かい合うと、一礼して到着を告げる。

それが、この家の当主と子息との距離だ。

父は暫く俺に視線を注いでいたが、俺が黙っているのを見て漸く口を開いた。

「……謹慎を受けていると聞いた」

「お聞きになったとおりです。不徳の致す所でお恥ずかしい限りですが、貴方のお気になさるまでもありません」

俺の言葉に、父は明らかに不快感を顔に昇らせた。右腕を執務机の上に乗せ、上体を傾ける。

「ヴェルナー家の子息が謹慎など受けて、気にする程の事はないだ？ 一体お前はどの侯爵家を何と心得ておるのだ」

「近衛師団での私の地位は、単なる士官候補ですよ」

「お前はヴェルナーの子息だ。いかなる時であれ、家名に泥を塗るような真似は許さん」

静かに、冷気が胃の中を這い上がる。  
ゆっくり。

「どこにあっても、それに相応しい行動を取れ。出来ないでは済まされんぞ」

肺を渡り、喉を這う。

「そもそも、王の守護たる近衛師団とはいえ軍などと、侯爵家に相応しい場所ではない。こうなった以上、もはや近衛師団に籍を置く事は認められん」

突き上げる笑いを抑えようとして喉が引き攣る。

——認める？ 誰が、誰を？

許可を得て師団に在籍しているつもりは全く無い。この男が、自分の許容内に置いているつもりになっていただけだ。

そもそもこの男が見ているのは、兄や俺という個人ではない。

ただ侯爵家を継ぐ為の、物だ。

当初は長子である兄以外の子供など、道具と見做す程にも、興味を抱いてはいなかっただろう。

弟が死ぬ間際まで父を慕った事すら、この男は知るまい。

もしかすると、どちらが死に、どちらが生き残ったのかさえ、分っていないのではないか。

薄れていく喘鳴が、耳の奥で響く。

「……近衛師団に関する裁量権は、例え貴方でもお持ちではないでしょう」

辛うじて、それだけを口にした。それ以上は、節度を保った言葉にはなりそうにない。

握った手の中で、爪が掌に喰い込んでいる事に気付き、それを緩める。だがその甲斐も無く、掌は再び強く握り込まれた。

「では、お前から近衛師団を辞すがいい。内務の席はどうとでもなる」  
当然俺が従うと、疑わない響きだ。

押さえ込んでいた怒りが、止めようもなく、一気に膨れ上がった。

「——断る。貴方の都合のいいように生きるのはまっぴらだ」

叩きつけるような口調に驚愕の表情を浮かべ、父は俺を見た。その眼を、正面から見据える。

「跡継ぎが必要なら、適当に優秀な者を見繕って据えればいい。それを望む者など、いくらでも探せるだろう」

「愚かな事を。ヴェルナー家の血を」

怒りと、笑いが込み上げる。

回廊を抜ける風が、あの夜を運ぶ。

夜明けは遠く、途切れていく呼吸以外、そこに物音は無い。

「血？ 残念だったな。この血を持つ者の中で、喜んで貴方の意を受けらる者などいない」

僅かに、指先が外套の下の剣に触れた。

「唯一、心から貴方の言葉を欲した者は、既にない。……貴方に省みられる事無く、死んだ」

左手が、外套の上から剣の鞘を掴む。

——この男を、斬ろうか。

まあ剣を抜いた所で、斬る事は叶わないだろう。

別にそれもどうでもいい。

ただ剣を抜けば、それがどんな形を取るにせよ、俺の望みどおり、ここから解放されるのは確かだ。

鞘を握り込み、右足を踏み出した時、父が呟くのが聞こえた。

「——あれには、辛い思いをさせた」

一瞬、呼吸が止まった。

ゆっくりと、視線を父の上に向ける。

何だって？

この男は、今、何を言ったのか。

「お前から書状を受け取った晩、私は直ぐにでも行くべきだった。だが、職務の前にそれを怠ったのは事実だ」

「……何、を」

「後悔していない訳ではない。だからこそ、お前には」

「——何を言っているんだ、貴方は」

手足が凍りついたような冷たさを帯び、麻痺していくのと比例するよう  
に、頭の奥が冴えていく。だが明瞭な思考を持った冴え方とは違う。  
「今更、そんな言葉は無価値だ。あの時に施されなかった修正が、今更  
効くと、そう思っているのか？」

お笑い種だ。

それを受けるべき相手は、既にいないというのに？

夜の明けける前に、呼吸は消えた。

『君が、笑えるように』

馬鹿な事を。そんな事を考えているから死ぬのだと、そう怒鳴りた  
かった。人の事などどうでもいい。彼が今も笑っている方がずっと重要  
な事だ。

本当に代わる事が出来たなら、そうしただろう。

だが、代わる事など出来ないまま、俺だけが今ここにいる。

今更、あの時この男がどう思っていたかなど、何の意味もない。

意味など無い。

強く握り込み過ぎた指が、外套の上を滑る。

剣が帯から外れ、音を立てて床の上に落ちた。

敷き詰められた絨毯に金属音を吸い取られながら、その音は部屋の空  
気を裂く様に響いた。

俺と父の、二つの視線が剣の上に集中する。

父はよろめくように椅子から立ち上がった。

「——ロットバルト、お前は」

身をかがめ、足元のそれを緩慢に拾い上げる。冷えた鞆の感覚が、意  
識に深く忍び込む。

だが、この剣をどうすべきか？

目の前で、呆然と俺の姿を見つめている男に向けるか。

何の為に？

あの父の言葉を聞けば、弟はそれでも喜ぶだろうと、そんな事を漠然  
と思つた。

俺は——何を望んでいるのか。

周囲が固い輪郭を崩すように感じられ、ただ無意識に父の前へと歩み  
寄る。崩れていく輪郭の中で、父と手の中の剣だけが確かな存在だ。

父はただ、信じ難い表情を浮かべたまま、俺を見つめている。

あと数歩、歩み寄れば、切っ先が届く。

剣を抜きさえすれば、終わる。

それとも——

俺に、向けるべきか。

指が、鏢を押し上げようと——

不意に、夜のしじまを縫って、慌てふためく声が複数走った。

俄かに回廊が慌しさを増したと思つた瞬間、両開きの扉が音を立てて  
開き、回廊から差し込む光に、見覚えのある影が浮かんだ。

凜とした声が響く。

「ロットバルト・アレス・ヴェルナー。俺はお前の謹慎を解いた覚えは  
ないか？」

崩れかけていた輪郭が、弾かれたように形を取り戻す。

振り向いた俺の前へ、レオアリスはゆっくりと歩み寄り、部屋の中央  
で足を止めた。

俺の左手が掴んだままの剣に眼を止め、僅かにその眼を細める。

「——無礼な。近衛の大将とはいえ、ここをどこだと心得ている」

苛立ちを滲ませ、だが普段の自分に立ち返る事でどこか安堵したかの  
ように、父がレオアリスを睨む。

レオアリスの漆黒の瞳が静かにその視線を弾いた。

「近衛師団ではないのは、残念ながら事実ですね」

「ならば去れ」

「俺が残念ながらと申し上げたのは、近衛師団に属する者が謹慎中の身  
でありながらその規律を破り、この場にいる事にです。貴方のご子息で  
はあるが、今は俺の管轄下にある。許可なく勝手な振る舞いは許されな  
い」

思わず俺は、それまでの状況を忘れ、レオアリスの顔をまじまじと眺  
めた。ついこの昼には、出歩いた事を咎めもせず、大して気にした素振

りも見せなかったのは誰だったか。

だが当の本人は至って真面目な顔で俺に視線を戻した。漆黒の瞳が俺を捉える。

「ヴェルナー一等官。速やかに近衛師団へ戻り、引き続き謹慎に付け」

言われるがままに、俺はレオアリスに向かって一礼し、扉に向かった。

呼び止める父の苛立った声に、レオアリスの澄ました声が重なる。

「本来なら再度処分を申し渡す所ですが、今回は危急のご用という事もあったのでしよう。侯爵の御前でもある、この場は不問に処しましょう」

先に門を出た俺は、そこでレオアリスが出てくるのを待った。警備の者達はみな、相手が近衛師団の大将ではぞんざいに扱う訳にもいかず、複雑な顔でレオアリスが通り過ぎるのを見送っている。

俺の前まで来るとレオアリスは足を止め、苦笑を浮かべて警備兵達を振り返った。

「アレはまずいだろう。今後は例え近衛師団総将であっても、闖入者は放り出せと言っておけ」

「……貴方が言いますか」

「確かになあ」

声を上げて笑うと、夜の中を、近衛師団へ向けて歩き出す。少し先に、彼の乗騎だろう、銀翼の飛竜が羽を休めているのが見えた。

「——何故、こちらに？」

当然の疑問だと思うが、レオアリスは呆れ返った顔で振り向いた。

「何で？ お前、さっき俺が言った事が聞こえなかったのか。謹慎中の奴が何度もふらふら出歩くな。ついでに言っとくが、謹慎中の帯刀は認められてない」

そう言うのと、さっさと飛竜の背に飛び乗る。それからふと思いついたように、俺に視線を落とした。

「……お前のところの准将が、蒼白な面で飛び込んで来た。お前が思い詰めた顔で、剣を持って出たってな。——良かったのか悪かったのか、

判らないが」

それに答える言葉は、俺にも無い。その代わり、別の事を尋ねた。

「少々面倒な事になるのでは？」

だがレオアリスは小さく肩を竦めただけだ。

「ま、アヴァロン閣下と内務長官の前で申し開きをする事にはなるだろう。だが俺の権限内だ。それよりお前の方がめんどくさいと思うぜ？」

「そうかもしれないね」

父との対面をあんな形で放り出してきたのだ。

頷いた俺に、けれどもレオアリスは真面目くさった顔で視線を投げた。「ここから歩いて戻ったら、一刻はかかる」

呆気に取られたままの俺を尻目に、レオアリスを乗せた飛竜は瞬く間に中空高く舞い上がった。

レオアリスにああは言ったものの、父が今晚の事を正式に取り沙汰すとは、俺自身思っていないかった。

あの時、どちらに進むべきか、双方共に見失っていたあの薄闇を、切り裂いたのは紛れも無く彼だ。

どこへ向かいたかったのか——思い返してみても、俺には見えない。殺したいと憎むほど、執着しているつもりも無い。

ただ、一瞬とはいえ、掴んだ剣を抜く先を見失った事に、僅かな混乱を覚えていた。

これ程に自分の意思が、不確かな土台に立っているとは思っても寄らなかった。たかが一つの悔恨の言葉が欲しかった訳ではあるまい。

あの場で俺を見据えた、漆黒の瞳を思い返す。闇よりも深く、闇を切り裂く。

答えを、彼は知っているだろうか。問いかければ明確な言葉が返るのか。

彼が答えを持っているはずも無かったが、無性に、それを思った。

二日間の謹慎の間に論文を提出し、俺は再び通常通り隊の訓練に戻った。

最初の乱闘騒ぎと直談判の件はすっかり知れ渡っていて、どうも関わるのは得ではないと判断されたのだろう、交わされる囁き声すら減っていた。

一方で意外だったのは、ごく少数ながら何が気に入ったものか、入隊早々五日も謹慎を食らった経緯について、興味津々で話を聞きに来る者がいた事だ。

聞かれて有難いものではなかったが、彼等と幾つか言葉を交わしている中で、判った事がある。

多くの隊士がこの第一隊に配属された事を誇りにしていた。レオアリスは二、三隊の大將よりずっと親しみやすく、一兵卒にでも気やすく声をかけた。訓練に於いてはかなり厳しい内容をこなさなければならなかったが、隊の風通しは良く、何より、最高位の剣士と謳われる存在が自分達の將である事は、それだけで気分を高揚させた。

出自が民間である事も、彼等にとっては共感を覚える要素のようだった。ただそれにより自分達の大将が軽んじられる事には、少なからず憤りを覚えている。

階級性の重んじられるこの社会の中で、確かにそうした傾向はあるだろう。それは俺自身常に身を置いてきた世界だ。近衛師団はその中でもましな方だと言っている。

訓練は普段と何ら変わる事なく続けられたが、さすがに手を抜くのは止めていた。それによって更に囁き声は無くなり、向けられる視線からもそれまでの色が消えた。

結局俺は、ひどく単純な事を、漸くそこで学んだ事になる。

数日は、ただそうして過ぎた。

父からの再度の呼び出しは無く、レオアリスが内務に出向いたという話も聞いていない。

平穩というには余りに宙に浮いたままの状態に、俺は戸惑いすら覚えていた。

あの夜、どうすべきだったのか、未だ答えは見出せないままに、ただ時間だけを過ごしている。

肺の奥にわだかまる焦燥と、それとは対を成す空虚な感情を、代わる代わる覗き込んでいるように感じられた。

レオアリスはあの夜、何を思っただろう。

剣を手にした俺を見て、父を斬ると、思っただろうか。

問い掛けてみたかった。

それよりも、ただあの漆黒の瞳を覗き込めば、そこに答えがあると、そんな気がしていたのかもしれない。

休憩中にそんな事を漠然と考えていた時に、不意に声がかげられた。「相変わらず、つまらなそうな顔してるな」

声の先を振り返ると、練兵場の周囲に巡らされた観覧席の一番手前、俺が寄り掛かっている、すぐ上に張り巡らされた塀に凭れるようにして、レオアリスが見下ろしていた。

「真面目にやってもまだ面白くないか？」

「……いえ——変わりましたよ」

それを面白いというのかは判らないが、確かに以前と訓練の感じ方は少なからず変わったように思う。

「そりゃいいや。にしても」

レオアリスは欄に頬杖をつくようにして寄りかかったまま周囲を見回し、苦笑を洩らした。他の隊士達は遠巻きに、だが何を話しているのかは気になるのだろう、視線をこちらに向けている。

「随分おっかなびっくりになっちまったなあ。お前が三人もボコるからだぜ」

「——護身は幼少の頃から叩き込まれているもので」

「なるほど……そりゃそうか。家が大きすぎるのも何かとめんどくさそうだ」

准将がレオアリスに気付いて歩み寄ってくるのへ軽く手を上げて答え

る。そう言えば彼にはまだ礼を述べていなかったと、その姿を視界の端に捉えながら思った。

訓練を増やすかな、と呟きが聞こえ、視線を戻すとレオアリスが複雑そうに眉をしかめた。

「だってなあ、五人だろ。問題大有りだ……。グランスレイなんかそこにもすごい青筋立てて、目え回してなかったら五人とも今頃別の意味でぶっ倒れてただろうな。……けど、あいつらもそれなりの腕なんだぜ。何しろ一隊は一番剣の腕がいい」

眉をしかめながらも、その顔は得意そうだ。

「まあ確かに、お前の腕は相当のものだ。常に相手の行動の二、三手先を読んだ動きだよな」

見ていたのかと、軽い驚きを覚えた。

冷えていた指先が、熱を帯びる。

「さすがにあの論文を書いただけの事はある。面白かったぜ、あれは。

それで何でそんなつまらなそうな面してんだか」

可笑しそうな響きを含んだ口調でそう言うと、寄りかかっていた手摺から体を起こした。

漆黒の瞳が深い色を宿して俺を映す。に、と口元に軽やかな笑みを刷いた。

「――望みを言えよ。全部とはいかないが、一つ位なら、俺が叶えてやるぜ。まあもちろん内容にも寄るけどな」

冗談とも本気ともつかない、軽快な口調だ。休息の終了を告げる准将の号令がかかったのを機に、レオアリスは手摺に置いていた手を離れた。鼓動が身体の裡で響く。

俺の望み？

判らない。だが

「――あのっ」

立ち去りかけた背中を呼び止める。自分でも思いも寄らない言葉が口を衝いて出た。

「俺と、手合せをして頂けませんか」

准将の卒倒しそうな顔が視界に入り、他人事のように同情した。一斉に静まり返った演習場の空気の中、振り返ったレオアリスの顔には、呆れたような、面白がっているかのような表情が浮かんでいる。

「――お前って、つまらなそうな顔ばっかしてる割には、やる事はほんどぶっ飛んでるな……」

「も、申し訳ありませんっ、単なる気の迷いで……良く言って聞かせますから、今回は……」

准将が真っ青になって、体を九十度も折り曲げるようにして幾度も頭を下げた。

この男は人がいい。面倒事ばかり起す部下を抱えて、人が良すぎる位だろう。尊重すべき相手だが、ただ、今、この時は邪魔をされたくはなかった。

「気の迷いじゃない。余計な口出しをしないでくれ」

「こ……、ヴェルナー、貴様……っ」

礼を言わなければと思っていながらこの態度は呆れたものだと思われと思う。

レオアリスはじつと俺の眼を覗き込んだ。

自分がどんな顔をしていたかは判らない。ただその眼を跳ね返すように黙って立っていた。

「……上官には礼儀を払うもんだぜ」

呆れたような口調でそう言うと、レオアリスは塀に手をかけて飛び越え、地面の上に降り立った。

纏っていた長布を外して畏まったままの准将に預け、静まり返った演習場の中央に向って歩き出す。

「来い。相手をしてやろう」

俺は一瞬馬鹿のように突っ立ってから、慌ててその後を追った。咄嗟に手にしたのは、軍の支給品ではなく、自身の剣だ。

足許の地面が綿にでも変わったかのように、ふわふわと覚束ない。自分で言い出しておいておかしな話だが、まさかレオアリスが申し出を受けるとは、思っていなかったのだ。

レオアリスは中央まで行くと、振り返って俺が着くのを待った。演習場内の全ての視線が、その場に集中していた。

張り詰めたような空気が、ビリビリと肌に伝わる。

広い演習場を埋め尽くすその圧迫感が、自分より頭半分ほど低いレオアリスの身体から発せられているのだと気が付いた時、自分の腕が、僅かに震えているのが分かった。

向かい合ったまま立ち尽くして動かない俺を眺め、レオアリスが笑みを浮かべる。

「どうした。いつでもいいぜ。組み手でも、剣でも、何でもな。好きに選べ」

圧されるように、剣の柄に手を掛けた。

だが、レオアリスは構える気配すらない。見れば鎧も身に着けておらず、剣もその手にしてはいなかった。

全身を急激に血が巡るのが判る。

ここに至って、まともに相手をする価値すらないのかと、そう思った。「……剣は、どうしたんです」

「気にするな。必要になったら出す。来ないのか？」

頭に、血が昇った。

剣の鞘を握った左手の指で、鏢を弾く。

同時に刀身を引き抜いた。

抜き打ちざま、間合いを詰める。

殺せる間合いだ。

喉を狙って走らせた剣は、だがレオアリスの身体には届かずに、空を切った。

「抜き打ちか」

レオアリスが浮かべた笑みは、嬉しそうですらあった。

僅かに身体を逸らして避けたのだと、その時は気付いていたか分からない。いや、避けるだろうと、その方向まで分かっていた。

左から抜き打てば、剣先は弧を描くように左から右へと走る。相手は剣先を避ける為には後方か、右に動く以外にない。かがめば次の動作へ

の移行が大幅に遅れ、また横薙ぎの剣の懐に入る奴はまずい。その上で、相手が引くのか迎え撃つのか。それさえ判断すれば、次の攻撃に移るのは容易い。

自分の動作を最小限に抑え、相手が反撃に出ようとすする前に次の太刀を繰り出す。そうして全ての動きを封じてしまえば、倒すのは呼吸をするよりも簡単な事だった。

だが何度太刀を繰り出しても、剣先はレオアリスの身体に掠りもしなかった。剣先が掠める寸前で、刃は空を切る。

僅かに届かないのではない。僅か紙一重の差で躲されているのだ。俺の太刀筋、間合い、全てが読まれているのだと、そう気付いた時には、既に肩で息を切っていた。肺が空気を求めて激しく喘ぐ。

極度の緊張と圧迫感が、疲労の度合いを濃くしている。それを与えている当の本人は、まるで気にした素振りもなく、楽しそうに笑った。

「なかなかいい太刀筋だが、甘い。お前は想定しすぎる」

「っ」

怒りに任せて頭上から振り下ろした剣は、レオアリスの左手に止められた。

親指と人差し指、たった二本の指に挟まれただけの剣は、押ししても引いても、びくともしなかった。

「今のが、一番いいかもな」

ふっ、と自分の足が浮いたのが分かった。腹に焼け付く痛みが走る。

身構える間もなく、数間先の地面に叩きつけられた。

一瞬、呼吸が止まる。それから、肺が急激に酸素を取り込もうと動き、過剰な空気の摂取に噎せ返った。

レオアリスの右足が僅かに浮いているのを見て、漸く蹴られたのだと気が付いた。

よろめく足を押さえて立ち上がる。周囲が何かを言っていたが、全く耳に入らなかつた。目の前に立つレオアリスの姿だけが、視界に明瞭に浮かび上がる。

剣を握り直すと、地面を蹴った。紙一重で避けるのなら、更に踏み込めばいい。それでも避けられれば、もつと。

難いだ剣を、下方から跳ね上げるように斬り返す。右上から叩きつけ、左から右へと、間髪を入れずに剣を戻す。

それでも剣先は一向に、レオアリスの身体には届かなかった。切っ先が止められ、また一瞬でも剣を止めれば、容赦なく蹴りが飛ぶ。

何度目か、地面に叩きつけられた時には、既に演習場内には声もなかった。僅かな呼吸の音すら恐れるように、息を潜め、ただ視線だけを注いでいる。

何故まだ立ち上がるのか、自分でも判らないまま、それでも力の入らない身体を無理やり起こした。全身の筋肉が俺の意思など無いように震え、呼吸すら苦痛に思える。

握力の失われた手は、剣を握っているのがやっとだ。腕も、足も、身体も、鉛を括ったように重い。肺は酸素を求めて忙しく動き、噎せる。自分の意志を受け付けない身体が、指の一本一本に至るまで——そこそが俺自身なのだと、今、初めて意識した。

そこには、物音一つ無い夜も、途切れていく呼吸も、父の姿さえも無い。

ただ、俺の意識があるだけだ。

視線の先に、風一つ吹いてさえないかのように、レオアリスが立っている。

その顔に、呆れたような、面白がっているかのような表情が浮かぶ。思えば、初めて会ってからずっと、レオアリスが俺に向ける表情はいつもそんな感じだった。

それでいて、どんな時も俺の正面に立ち、その視線を向けている。「ホントに、妙な奴だ。普段はつまらなそうな顔をしているくせに」

レオアリスはゆっくりりと、右手を自分の鳩尾に充てた。ずぶり、と手首まで、身体の中に沈む。

青白い光が漏れ、その場を覆った。

光が強く輝きを増すにつれ、何かを握ったような形をした右手が再び

現れる。

光が消えた時、レオアリスの右手には、一本の剣が握られていた。

青白く光を纏う、美しい長剣。

場内に、波のように、感嘆の音が広がる。

初めて眼にした——、

最高位と謳われる剣士の、剣。

目の前の身体から発せられる身を切るような空気が、俺の皮膚に叩きつけられる。

「最後だろう。来い」

その言葉に突き動かされたように、俺は踏み込み、間合いを詰めた。何も考えないまま、鞘に収めた剣を抜き打つ。

走った切っ先は、レオアリスの身体に届く直前で、青白い剣に阻まれた。

その刀身に触れた瞬間、振り抜いた刃は俺の手の中で、根元から砕け散った。

青白く光る剣が風を巻く。

衝撃を感じたのかどうかは分からない。

ただ、闇に吞まれていく意識の中、いつかの弟の笑みが浮かんだ気がした。

「左中右いずれの中将も、全て異存はありません。上将のご意向の通りに」

「意外だな。もつと反対するかと思ったが」

離れた所で交わされる会話に、意識がゆっくりと浮上する。

「元々、時期だけの問題でしょう」

「まあ、一隊の都合だけで言えばな。今すぐだつて必要だ」

レオアリスと、誰か——副将が話をしているのだとぼんやりとした頭で思った。

「貴方を相手にあれだけの剣技を見せれば不満も出にくいでしょう。そこまでお考えになっていたかどうか怪しいものですが」

「そういう事においてくれ」

「全く——。では、私はこれで」

足音に続いて、扉の閉まる音が届く。

眼を開ける。眩しい光が差し込み、俺は眼を覆うように手を翳した。

途端に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。

窓から差し込むのは、熱の失せた西日だ。眩しさに目を細めながらその光を辿って、窓際に誰かが立っているのが分かった。

俺の気配に気付いたのか、振り返る。

「気分はどうだ？」

笑いを含んだ声の響き。

ゆっくりと近づいてくる、その姿を眺める。

寝台の脇に立って、レオアリスは俺の顔を見下ろした。

「限界まで動いて、少しは気分が晴れただろう」

俺より年下の癖に、分ったような口を利く。だが、少しも悪い気分ではなかった。

痛む身体を引き起こし、寝台の背に寄りかかって改めて見回すと、どうやら医務室のようだった。

レオアリスがどこか得意げに腕を組み、首を傾げる。

「お前、また謹慎だからな。上官への反抗と暴言、分不相応な振る舞い、隊の規律を乱したって事で、通常は放出処分だが——。まあ今回は俺にも責がある。口きいといてやったから、七日間くらい寝てるよ。普通じゃないぜ？ 入隊早々半月も謹慎を食らう奴は」

これだけ叩きのめしておいて、尚且つ七日間もの謹慎処分を与えて——何しろ処分を命じるのは第一大隊の将であるレオアリス本人なのだ、それで得意そうに言うものだろうか。

先ほどまでの、触れるものを切り裂くような空気は、すでにその周りにはない。年相応の、少年らしき残した気安げな雰囲気だけだ。

「全く、世話の焼ける奴だ」

颯めつらしくそう言うと、肩を竦めた。

おそらく彼にとつて俺は、ただそれだけの存在なのだろう。

家も、名も、何も関係はない。隊の規律も守らず、乱闘騒ぎを起こし、挙句の果てには職分を越えて大将に手合わせまで申し出る。

(これは、とんでもないな)

ふいに笑いが込められ、痛む身体の対処に困りながら、声を立てて笑った。笑いながら思う。声を出して笑ったのは、いつ以来だっただろう。

笑っている俺を、レオアリスは不審そうに眺めた。

「何が可笑しいんだ。頭でも打ったか？」

尚も笑いが止められないでいると、さすがにむっとしたのか、眉を顰める。

「お前。いい加減に笑いやまないと、本当に除隊させるぞ」

そう言うと、背を向け扉へと向かった。取っ手に手を掛けたところで、

慌てて引き止めた。

「待ってください。それは困る」

眉を顰めたままレオアリスが振り返る。

「除隊は、勘弁していただきたい」

レオアリスは少しの間、表情を崩さずに俺を眺めていたが、やがてあの呆れたような笑みが浮かんだ。

「……だったら、七日間おとなしくしてる」

「七日経ったら、また手合わせをしていただけますか」

その頬の呆れた色が、更に濃くなる。

「お前なあ……。七日したら、また謹慎処分を受けるつもりか？」

「それもまあ、仕方ないでしょうね」

漆黒の瞳に深い夜の色を湛えて、俺に向けられる。どこまでも深く、けれど俺が今まで眺め続けてきた果ての無い闇ではなく、その先に光を透かし見る色だ。

それが何を見つめてきた故の色なのか、その時の俺には量りようもなかったが、何のしがらみも無くただ俺に向けられる、その瞳が心地良いのだと、そんな事を思った。

この瞳の前で俺は、俺以外の何者でもない。

だが、その真つ直ぐに相手に向けられる瞳は、王都にあつては、この若い将には有意にばかり働きはすまい。

俺は必要だろうか。この将に？

そうであるならば、俺がああ家に生まれた事すら、価値のあるものに変わるだろう。

口を開いて言うべき言葉を捜し——やがて諦めたように閉ざして、レオアリスは再び俺の横に立った。

「その必要はない。今回の処分が解け次第、お前は俺の直轄の預かりとなる。……他の小隊に居ちゃ、准将の頭が禿げちまうからな」

思いもかけない言葉に眼を見開いた俺の前で、レオアリスは一軍を預かる将の空気を纏った。

その空気に押されるように寝台を降り、その前に片膝を付く。

頭を下げた俺の前に、差し伸べるように、その右手が延べられる。

「ロットバルト・アレス・ヴェルナー」  
ゆっくりと。

自分が形作られていくのを感じる。

それは、俺自身を呼ぶ名だ。

「近衛師団第一大隊参謀部の任を命ずる。処分が解かれ次第、速やかに参集せよ」

「——謹んで、承ります」

名を呼ばれた気がして目が覚めた。

身体が軋む感覚に、一瞬あの医務室にいるのかと思ったが、見えたのはここ数ヶ月間ですっかり見慣れた、参謀部の天井だ。身体が軋むのは長椅子で仮眠を取っていたからだだろう。

漸く夜が明け始めた頃合いのようで、室内はまだ薄暗い。燭燂の仄か灯りに、人影が揺らぐ。

顔を向けるといつの間に来ていたのか、レオアリスが振り返った。

「……済みません。いついらしたんです？」

「今さっきだ。いいぜ、寝てて。皆疲れてるだろう。どうせまた全員泊まり込んでるんじゃないかと思っただけ。もう五日目くらいか？」

「六日ですわね」

長椅子から身を起こした拍子に何か足元に滑り落ち、布が掛けられていた事に気付いた。

見回せば、そこここで倒れるように眠っている参謀官達の上にも、同じように布が掛けられている。

「悪いな」

礼を言う前にレオアリスが笑う。

立ち上がり、レオアリスの座っている執務机に行くと、卓の上に重ねてあった書類を手渡した。つい先刻までこれを仕上げる為に掛かりきりになっていたものだ。

大まかに言えば第一大隊千五百名の構成情報を纏めたもので、六日の泊り込みの原因となった一つでもある。

「今日が期限の内務への書類です。ご確認を」

薄明かりの中でレオアリスが書類を繰る。暫くして頷き、卓上の筆を取ると署名して返した。

「に、しても片付いたよなあ……。ほんつと、お前が参謀部に来てくれて良かったぜ」

レオアリスは心底安堵したように、快活な笑みを浮かべた。

「……私は少々後悔しましたが」

多少の皮肉は返すべきだろう。

参謀部に配属されてからというもの、目の回るという意味が身を以て理解できるほど忙しい日々が続いたからだ。今回は六日で済んだが、当初は半月近くはこの長椅子が寝台代わりだった。

「いきなり一等参謀官として任命された理由が、良く判りましたよ」

「だって指示するヤツが階級下じゃ、どっちもやりにくいだろ。でも、これだけやってくれば誰も文句は言わない。実際マジで感謝してるんだ。事務機能麻痺状態だったもんなあ」

レオアリスはしみじみ呟いて、俺の執務机の上に腰掛け脚をぶらぶらと動かしながら、室内を見回した。

「あの地層みたいな書類の壁が片付いたのもすごいけど、書類が全部きっちり分類されてるのがすごいよな。ちよつと前だったらどこに何があるかどころか、足の踏み場も無い位だったんだぜ」

「懐かしそうに言わないでください。一言言わせて戴ければ、参謀部が文書経理を担っている事がまず問題だと思いますね」

参謀部本来の役割である戦術論、戦略論の検討、提言以外に、五名の参謀官達だけで第一大隊全体の文書、経理、その上に千五百名の隊士の管理等を一手に担っているのだ。それで機能停止を起すなど言う方が無理がある。

配属された初日にその状況を聞き現状の説明を受けた時には、さすがに先行きが見えずに頭を抱えた。書類の記述方法や保管も個々の参謀官ごとにばらばらで、まず書類の読み込みにかかなりの時間を要した。事務作業の仕組みを整理し軌道に乗せるのに、半月はかかっただろう。

圧倒的に、人員が不足している。

だがレオアリスはその件はお手上げだと言いたげに、あっさりと肩を竦めただけだ。

「仕方ない。内務には文官の配置要求はしてるけど、付かねえんだもん。付くのは師団の総務までだ。まあ一応数字とか文書に強いヤツを選んで補佐に当ててただけだよ。さすがにキツイっつーか」

こうした状況の背景には、学問を専門に修めている者が少ない事が大きな理由としてある。

地方ほどではないが、王都でも読み書きが出来ない者は少なくはない。文官は貴重で、そのほとんどが内務など他の四部局に優先して配置される。

「俺も何度か徹夜したし、これからも極力手伝うからさ、そこら辺は当面多めに見てくれよ」

実際レオアリスは何度も足を運んで、自ら書類の作成や整理を手伝った。俺がここで問題なく機能出来たのはそのお陰だ。

「そのうち何とか内務を説得する。……結局は、俺の力不足が原因だからな」

少し視線を反らせた気まずそうな物言いは、彼の背景を差したものだ。それは不愉快ながらも実際にあり、この階級性の社会機構の中では切り離し難い問題ではある。

だが、それならそれで、そこは俺の領分でもある。

「——その件は私が交渉しますよ。機能分離は必要です。いつまでも大将に書類整理をさせる訳にも行かないでしょう」

レオアリスはまだ表情を曇らせてはいるものの、もう一度、まだ眠っている参謀官達を見回し、苦笑した。

「俺が手伝う分にはいいけど、これじゃあな」

相当疲れているのだろう、彼等が目を覚ます気配は無い。

レオアリスは卓上に置いてあった文鎮を手にとると、感触を確かめるように手の中で放りながら、傍らの俺を見上げた。漆黒の瞳に、面白がるような色が過ぎる。

「今だから言うけどな。お前が師団に入隊するって聞いた時の騒ぎ、知ってるか？」

「騒ぎ？」

入隊前に何かあったのだろうか。ただ、あったのだとしてもそこまでの責任は持てないが。

だが出てきたのは、俺の予想とは全く違う言葉だった。

「貴重な学院出でしかも首席だろ。相つ当他の隊としのぎを削って、で、うちが勝ち取った」

にや、と口角を上げる。思わず額に手が上がった。

「……やられたな……」

「あとはお前をどう説得して参謀部に付けるかが課題だったんだけどな」

レオアリスが浮かべた笑みに釣られるように、思わず笑いが込み上げる。

彼等に見れば、俺の足掻きは願ったりな所だったという事だ。だが、悪い気分ではない。

レオアリスはそれすら見越したように再び面白そうに笑った。

「師団を選んでくれて良かったぜ」

何か一言返すべきかとも思ったが、結局止めた。それはこの状況下の中でも、俺の言うべき言葉だ。

「……では、これはこのまま内務に提出しておきます」

「後で届けさせればいいんじゃないか？ まず帰って寝ろよ」

「散々急かされましたからね。朝一で突き付けてやろうかと」

「そういや、お前意外と負けず嫌いだったなあ……」

苦笑混じりにそう言うと、レオアリスは座っていた机からひよいと降り立ち、改めて眠っている参謀官達を見下ろした。

「こいつらも労ってやらないと。休みは何日取れる？」

「一日と言いたいところですが、交替なら二日は」

「俺が手伝う。三日取らせよう。お前も身体休めるよ。せっかくの優秀な参謀官に倒れられちゃ困る」

「文官の間違いでは？」

レオアリスは可笑しそうに声を上げると、先に立って扉を開ける。暗い室内に、冷えた大気と黎明の光が流れ込み、一瞬視界を白く染めた。

父と対峙したあの夜の後、幾日かして、南方の別邸に父が訪れたと聞いて、俺は少し笑った。

弟の墓前に何を言ったかは知らないし、敢えて尋ねる気もないが、彼は喜んだだろう。

視界の先に、朝焼けを背にした王城の尖塔が見える。

おそらくまだ父はそこに居るだろうと、そう思った。

まあ、居れば挨拶くらいはしてもいい。

あれから父との関係に急激な変化があった訳ではない。

ただ、お互いの立つ位置は以前より明確になり、それを認識するようになったと言うべきか。

時折、ふと思う。

もしあの時、言ってしまうえば稚気にも近い感情のままに、この近衛師団を選択しなければ、俺は未だにあの夜の中にいたのではないか。

夜明けは遠く、夜気の帳は待ち侘びる音を運ばず、弟と共にただ自分が死んでゆくのを待つだけの。

前を歩くレオアリスが白い光の中で少し眠そうに欠伸を洩らし、それから振り返った。

「これから下道行くんじゃめんどくさいだろ。ハヤテを出すから乗っつけよ」

ハヤテとはレオアリスの乗騎の銀竜の名だ。大将騎である銀竜ならば、途中の身分確認も必要なく王城まで飛べる。

「礼はこの後の昼寝をグランスレイに黙っててくれればいいからさ」  
「昼寝と呼べるのかどうか」

レオアリスはそれにはただ笑って、厩舎へと足を向けた。

——あの日、この年若い将に出会った事だけが、俺を変えた訳では無  
いだろう。

だが確実に、おそらくは意図すらなく、ただ俺の正面に立つ事で、俺  
の迷いに一つの選択を指し示した。

劇的な事柄だけが、世界を変える切っ掛けになるとは限らない。

例えば夜の闇に一筋差し込む曙光のように、静かに、けれど確実に、  
世界を染め上げてゆくものはあるだろう。

おそらく誰もが、その先にあるものを得る為に——

暁を渡り、深い夜を抜ける。